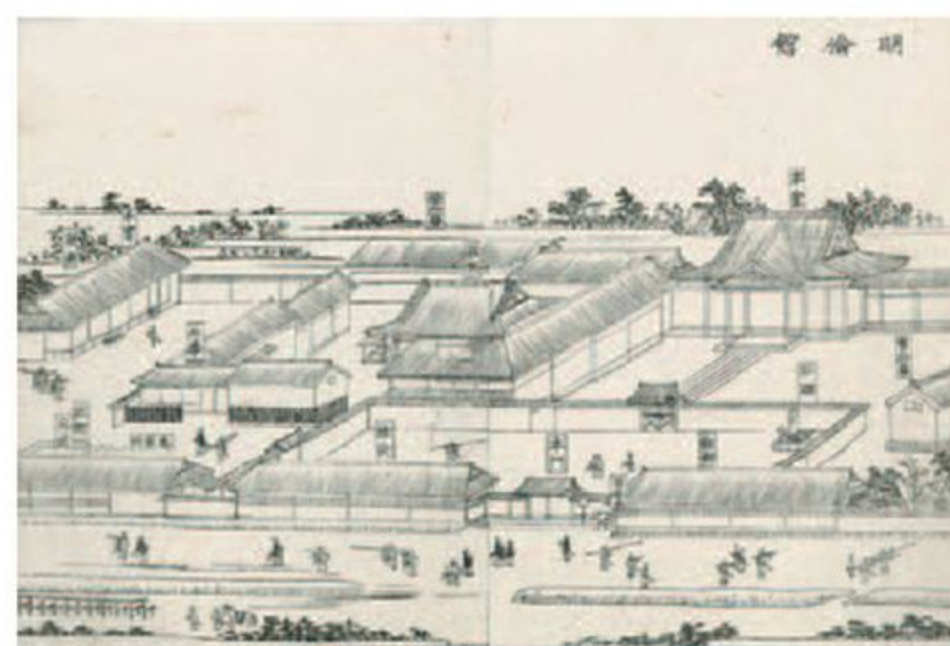




創基200周年、 「志」をたどる ～山口講堂から新制大学まで



藩校明倫館

江戸時代後期、各藩でおこなわれた藩政改革において、改革の重要な軸のひとつとみなされたのは、教育であった。ゆらぐ幕藩体制のなかで、時代をみすえた政策を進めることができる、有為な人材の育成が期待されたのである。

周防と長門をおさめていた萩藩もまた、教育に力を注ぎ、藩校明倫館を核として、領内に郷校、寺子屋、私塾などをもうけて、明倫館を範に教育をおこなう。

山口大学の淵源にあたる「山口講堂」が設立されたのは、文化12(1815)年。このような時代を象徴する存在として生まれ、以来、発展していく。

山口は、今も文教都市として語られるまちである。室町時代には、京都や大陸の先進文化を積極的に受け入れ、文化人を庇護した大内氏のもとで、「大内文化」が花開いた。毛利氏の時代にも、山口は、萩、三田尻と並び「町方」が置かれた重要な都市であった。その地に、萩の明倫館、三田尻の越氏塾と並ぶ山口講堂^{えっしじゅく}がつくられ、修学の道が開かれたのは、必然のことともいえる。



瑠璃光寺五重塔



「山口講堂跡」記念碑



山口講堂の扁額



山口講堂の蔵書「詩經集註」



山口講堂の講堂蔵書印

1

すべてののはじまり、 「山口講堂」

上田鳳陽、学問所を発起

山口に生まれた萩藩士・上田鳳陽（茂右衛門）は、寛政12（1800）年11月、萩に遊学して藩校明倫館に入った。学頭・繁澤規世に師事して、9年の長きにわたり在学し、儒学、国学をおさめる。

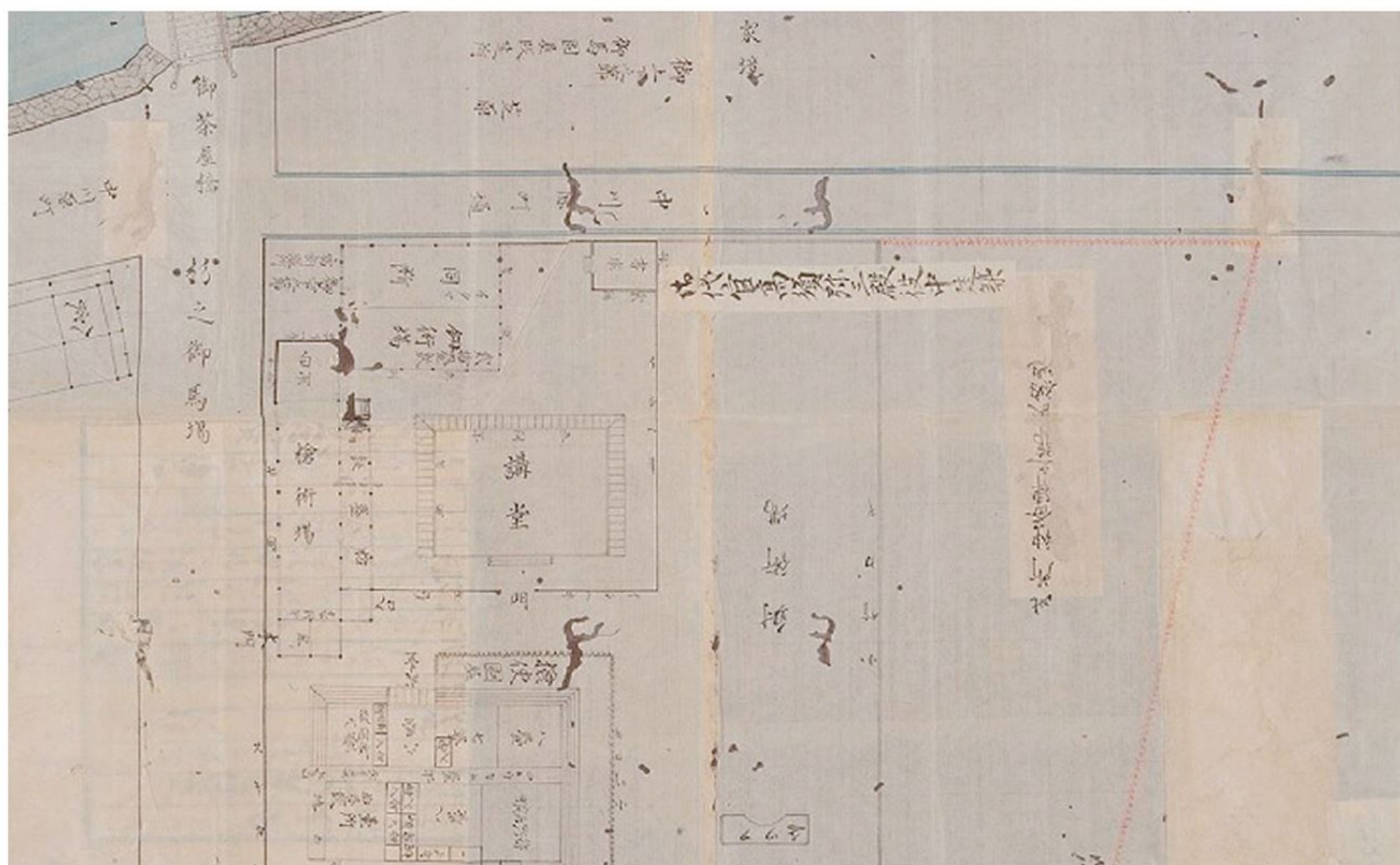
文化6（1809）年11月に明倫館での修学を終えた鳳陽は、山口に帰り諸士の教育にあたったが、当時の山口には学問所がなく、書籍も乏しい。このため、鳳陽は学舎の建設を発起する。

文化12（1815）年2月、鳳陽は藩に対し、申し立てをおこなった。

「山口のまちに武芸の稽古場、馬場はあるものの、いまだに本格的な学問所がないため、自力でも学問所を開設したい」

と、明倫館の学頭・中村九郎兵衛を通じて藩へ願い出たのである。

藩はこれを受け、建築のための用材を藩有林から伐採することを許可し、資銀を給付し、中村九郎兵衛に事業を援助させた。山口の豪商や周辺の豪農らの協力も相次ぎ、4月、山口の中河原に講堂が落成し、「山口講堂」と呼ばれることになった。



山口講堂剣鎗射術場并検使固屋共地差図(山口県文書館所蔵)

藩主が勉学視察

当時、山口の中河原には、藩主の参勤や領内巡視、他藩の役人との応接の際に使う公館「山口御茶屋」があった。山口講堂が建てられた場所は、その東南側、今でいうと、山口公設市場(平成24年に解体)があった位置である。

古地図によると、講堂は、藩の「検使固屋」の敷地の一部にあり、正面幅が約10m、奥行きが7.3m、三面に回り縁のついた小規模な平屋だったようだ。

講堂が完成した4月、藩主・毛利齊熙^{なりひろ}は、氷上山興隆寺に参詣の途中、山口御茶屋で山口在住諸士の文武諸芸を視察した。鳳陽の門弟18名が「孫子」、「詩経」などの講釈をし、平岡弥三右衛門らの門弟80名が武芸を披露したという。鳳陽の私塾として生まれた山口講堂であるが、藩主もその開設を奨励していたことがうかがわれよう。

以後、山口来訪時や江戸参勤の帰途などに、藩主が山口講堂を観閲することが慣例となり、明倫館、越氏塾とともに書籍を下賜されるようになった。



山口講堂の設立以降、文教施設が充実した山口市(写真は、大正時代の山口市中心部)



榎野川

志を現在へ

山口大学の8つの学部のうち、もっとも古い歴史をもつ経済学部。その前身である「山口高等商業学校」の校歌に、次のようにうたわれている。

仰ぐは鳳^{ほう}翽^{べん}臨^{ふし}むは榎^の野 基を文化の遠きにおきて
 時世の進みに伴ひ来る 山口高等商業学校

「基を文化の遠きにおきて」の「文化」とは、「文化12年」、すなわち、山口講堂が開設された年を指す。

山口大学の基となった山口講堂から、200年。山口の重要な教育機関として時を刻み、この地における教育のいしずえをつくったその志は、脈々と、現在へと受け継がれている。

建学の祖 上田鳳陽



上田鳳陽碑(左)と服部東陽碑(右)(山口市宮島町)

藩校明倫館で国学、儒学を学ぶ

山口講堂開設を発起した上田鳳陽とは、どんな人物だったのか。

明和6(1769)年、萩藩の下級藩士・宮崎猪兵衛在政の三男として生まれ、幼いころ、上田平右衛門清房の養子となる。

寛政12(1800)年11月、32歳で藩校明倫館に入学、文化6(1809)年まで在学し、儒学や国学を学んだ。修学中は、藩費生となり、3年の規定年数をこえて学んだ。

山口講堂を発起するのは、文化12年、鳳陽47歳のときである。藩への願書からは、藩にとって重要な地であった山口に、いまだ学問の環境がととのっていないことを深く憂える心情が読みとれる。

鳳陽は、講堂開設の働きを評価されて下級武士の身分から中級武士へと昇格し、研究に専念できるよう「儒役」という役職に引き上げられた。

晩年まで学問・教育に熱意

講堂開設後は、かねて希望していた明倫館への再入学をはたし、1年間、国学関係の書籍(「大黒屋本」)を研究する。

このように国学に精通し、故事にも詳しくことから、山口代官から委嘱されて、「山口宰判風土注進案」の編纂にあたった。数ある風土注進案のなかでも、「山口宰判風土注進案」は、その精細さから高く評価されている記録である。

嘉永6(1853)年、鳳陽は85歳でこの世を去った。年を重ねてなお、藩士の教導につとめ、晩年まで藩より昇格や増給を受けたという。鳳陽が、地方の文教開発に大きく貢献し、それを藩が高く評価していたことをあらわすものであろう。

無給通本人

上田茂右衛門

文化十二亥年四月十五日

△一代遠近附被仰付

△一代儒役

右文学抽令出精候段達

上聞候、往々御用ニ相立諸人之

励ニ茂可相成儀ニ付、身柄一代

遠近付ニ被仰付儒役ニ被召仕

学問指南被仰付候、尤二代目より者

最前之身通江被差返平士ニ可

被召仕候事

右之節詮議

前簾明倫館入込文学出精追々上達仕

近年者於山口門弟取立仕候処、只今之身通ニて者

教導筋間茂御座候由学頭役中村九郎兵衛より

内々申立之趣茂有之候、山口ニ而武芸之儀者

稽古場も有之、馬場等も御座候処、学問所

無御座ニ付、近比彼者自力を以家塾をも

取立候由御座候、偏ニ学問一途ニ相傾キ居候

者之由相聞候間、本文之通被仰付候而者

いか、可有御座哉と伺之上右之通被仰付候事



「御賞美先例」三篇・二十七(山口県文書館所蔵)
鳳陽の昇格や山口講堂開設の経緯などが分かる



山口宰判風土注進案(山口県文書館所蔵)

※風土注進案…藩命により、防長両国の各村落について、故事来歴や地理などを数十項目にわたって調査しとりまとめた文書。各町村から注進する形式で、一町村ごとに一冊に編纂された。



上田鳳陽の墓(山口市乗福寺)



山口講習堂玄関(山口県鴻城高等学校に現存。鴻城義塾創設にあたり山口中学校より譲り受けた)

3

文武の総合学舎、 「山口講習堂」へ

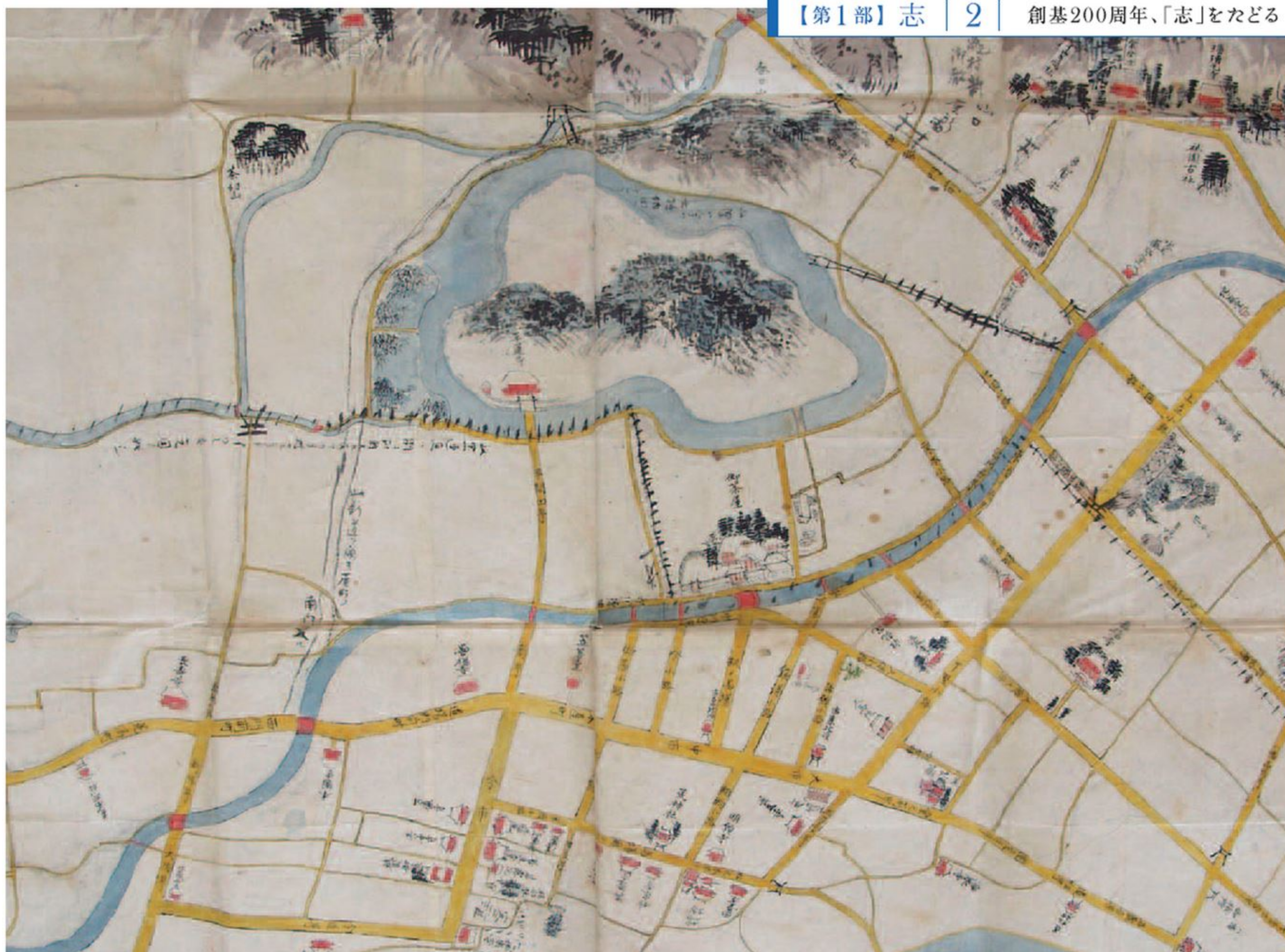
「明倫館」の教育に準拠

学問所として出発した山口講堂だが、しだいに、剣術、槍術、馬術など、武芸の稽古場としても整備されていった。これは、文武の両面を奨励した萩藩の天保改革にも沿っている。

弘化2(1845)年、鳳陽は藩に願い出て、山口講堂を「山口講習堂」と改称し、山口における文武諸芸の稽古場にすることを許された。山口講堂の設立から30年、山口講習堂はここに、文武両道を学ぶ総合学舎へと発展をとげたのである。

山口やその近郊に住む諸士の子弟は、山口講習堂で学び、なかでも成績の優秀なものは萩の明倫館へ進学した。明治維新で活躍した井上馨もそのひとり。このように、山口講習堂は、藩校明倫館の支校的存在となり、藩の人材育成のかなめとして、重要な役割をになうことになった。

安政5(1858)年、明倫館助教の山県半蔵(宍戸^{たまき}磯)が、学事を監督する「督学」として山口講習堂に派遣された。山県は、課目の改正などをおこなって、教育内容を明倫館に近づけたほか、教科書、書台などをととのえ、畳、壁、屋根を修繕して、施設を整備した。



山口町村図(山口県文書館所蔵)



山口長山稲古場差図(山口県文書館所蔵)

明倫館の直轄に、そして亀山へ移転

万延元(1860)年、山口講習堂と三田尻越氏塾は、明倫館の直轄となった。文学の諸役は、すべて明倫館から派遣され、両校の教授は、明倫館の助教が兼務することになった。

こうして、就学する人数も増加していったが、その一方で、校舎は狭くなり、老朽化がめだつようになった。

万延2(1861)年、亀山のふもとにあった空き地に校舎を移転、改築することが決まる。工事は山口代官にまかされたが、藩からは銀20貫目が支出されたため、これに感激した在住諸士が、すすんで土木工事に従事した。同年9月には新校舎が落成。亀山のふもとのこの地は、以後、学校名の変遷を経つつ、最終的に山口大学が吉田地区へ移転する昭和48(1973)年まで、学舎の敷地として使用されることになる。



4

幕末動乱、 「山口明倫館」と改称

文教の中心は萩から山口へ

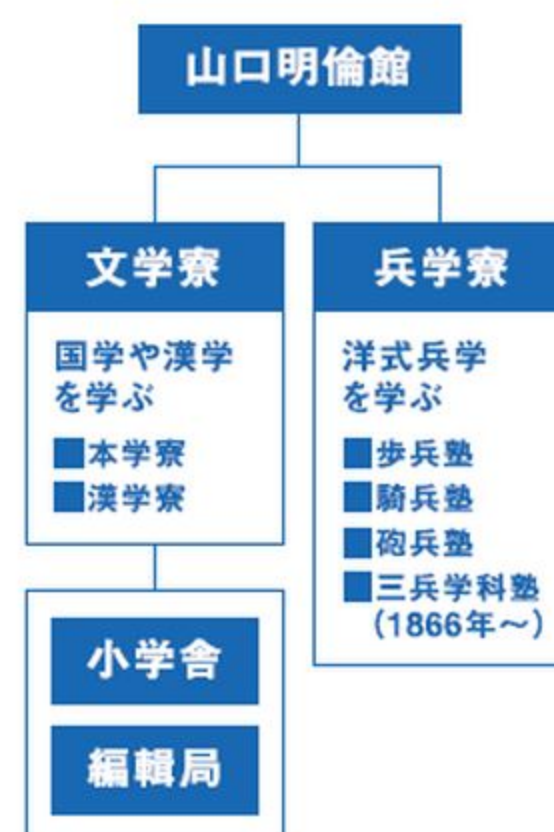
幕末期をむかえ、藩の情勢はしだいに緊迫したものとなってくる。

文久3(1863)年、攘夷決行に備えて藩庁が山口に移され、萩に代わり、山口が政治、軍事の中心になったのである。萩の明倫館の諸生も多くが山口へ移ったため、山口講習堂は、「**山口明倫館**」と改称し、藩の文教の中心となった。

ところが、翌元治元(1864)年、長州征伐のあおりを受け藩の中枢が萩に戻され、山口明倫館はいったん廃止となる。

その3か月後の慶応元(1865)年3月、藩主敬親は山口に戻り、山口明倫館は復興した。山口明倫館は、「文学寮」と「兵学寮」に分かれ、文学寮には、基礎教育を行う「小学舎」と、歴史編纂を行う「編輯局」が附属していた。文においては人材の輩出、武においては有能な士官の養成が第一義とされた。

戊辰戦争での軍事的手腕で知られる大村益次郎は、山口明倫館兵学寮の教授であった。山口の普門寺を宿舍として、諸士に歩・騎・砲の三兵学を教え、藩の軍政指導者としても活躍した。





幕末山口市街図(全体) (山口県文書館所蔵)

5

明倫館から 「山口中学」へ

洋学教育に重点

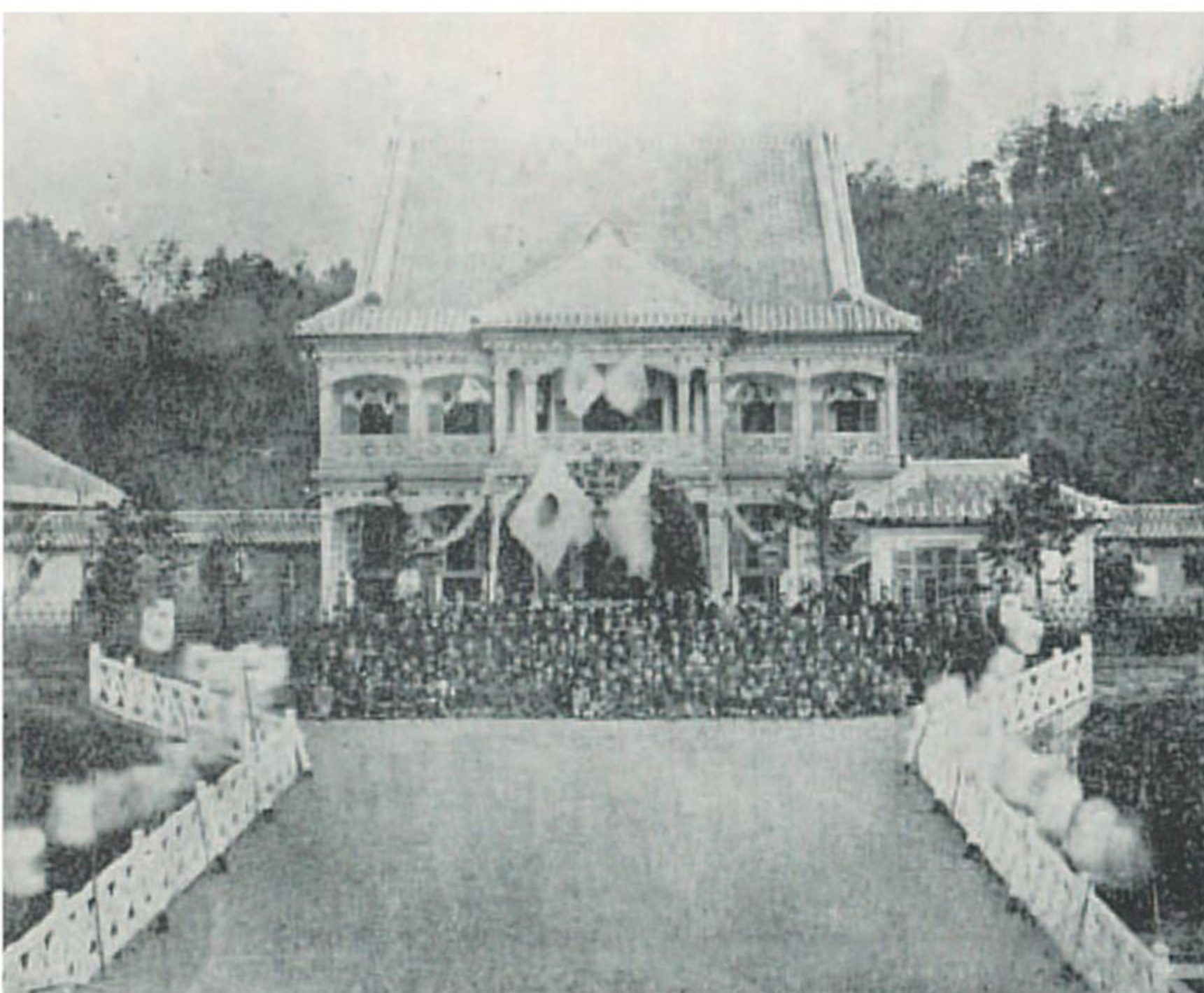
明治維新をむかえ、新政府は欧米風の学校教育の基礎づくりに乗りだした。

まず、明治3(1870)年、「大学規則」、「中小学規則」を定める。学校を大学、中学、小学の3種に分け、中央に大学を1校、各府藩県に中・小学をもうけることとした。

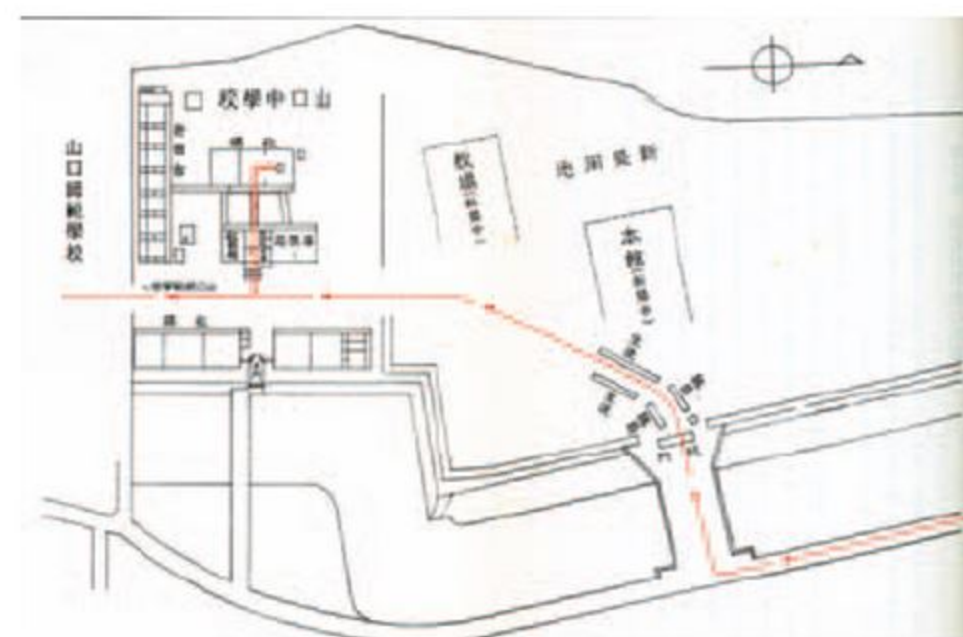
これを受けて、山口・萩の両明倫館はそれぞれ「山口中学」「萩中学」と改められ、三田尻講習堂や諸学校、郷校が「小学」となった。

山口・萩中学では、8歳から16歳までのものが、まず文学寮で学んだ。その後、身体の強健なものが選抜されて歩兵講習所で修業後、兵学寮、砲兵講習所のいずれかに進んだ。また、文学寮の終了者のなかから選抜されて、新設された「洋学寮」に進むものもいた。それぞれの修業年限は3年で、優秀なものを大学へと進ませた。

明治4(1871)年、歩兵講習所、兵学寮、砲兵講習所が陸軍局の管轄になり、山口中学には文学寮と洋学寮のみが残ることになった。軍事的色彩がなくなり、中学は普通教育の場に転換したのである。同年、廃藩置県により、山口中学は山口県の管轄になった。



県立山口中学校新校舎落成式(明治19年6月完成)
現山口県立美術館入口付近



当時の県立山口中学校校舎配置図
明治18年7月、明治天皇が山口中学校と山口師範学校を視察された時のもの



県立山口中学校正門にて記念写真(明治18年頃)

6

激流にいどむ 防長教育

独自の進学体系を模索

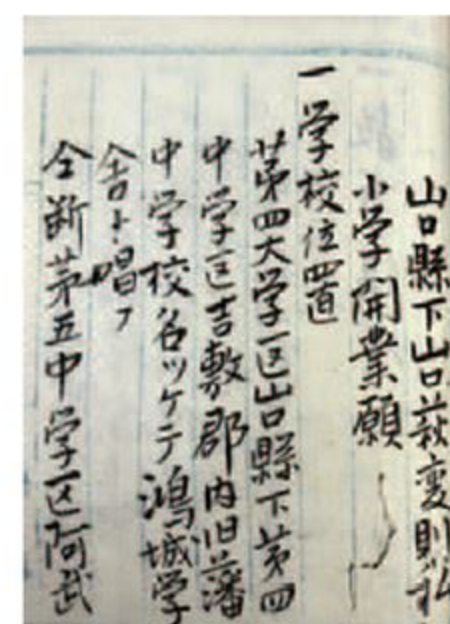
明治5(1872)年、「学制」公布。県はこれに対応しつつ、試行錯誤を重ねる。

まず、山口中学を含む県下の学校を廃止して、山口・萩・岩国・豊浦に「**変則中学**」を設立した。しかし、翌年には経営困難によりこれを廃止、山口と萩に「**変則小学**」を設立した。しかし、やはり経済的な問題から、翌年閉鎖され、山口・萩変則小学はそれぞれ**鴻城学舎**(山口上等小学校)・**巴城学舎**となる。明治8(1875)年、2学舎は資金の大部分を寄付していた毛利家の私立となった。さらに、明治11(1878)年、鴻城学舎は**私立山口中学校**に、巴城学舎は同萩分校になった。

このように、数年にわたり曲折をくり返すなかで、県立の中等教育を振興させようという運動が起りはじめた。県内外の有志から寄付が集められ、それをもとに、明治13(1880)年、山口・萩・豊浦・岩国・徳山の5学区に**県立中学校**がもうけられた。さらに明治17(1884)年、山口中学校と他の4校は、本・分校という関係になり、山口中学校には県内でただひとつ高等中学科が併設され、萩・豊浦・岩国・徳山の初等中学科を卒業したものを**県立山口中学校高等中学科**に編入させるという体系ができあがる。



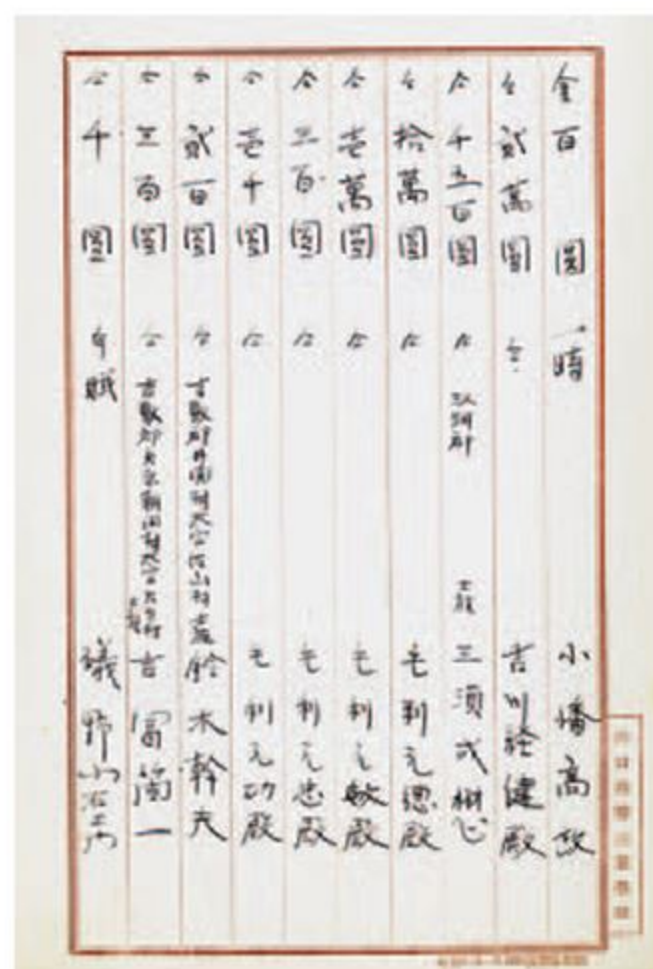
「学制」、「中小学章程」(山口県文書館所蔵)



山口県下山口萩変則私小学開業願
(山口県文書館所蔵)



当時の県立山口中学校校章



出資者の一覧(抜粋)
 (『私立防長教育会資本出金名録』より)



校長から在県評議員への依頼文
 (『防長教育会貸費生に関する書類綴』より)



毛利元徳(『防長教育会百年史』より)

7

防長教育会の創設 — 県教育のバックボーン

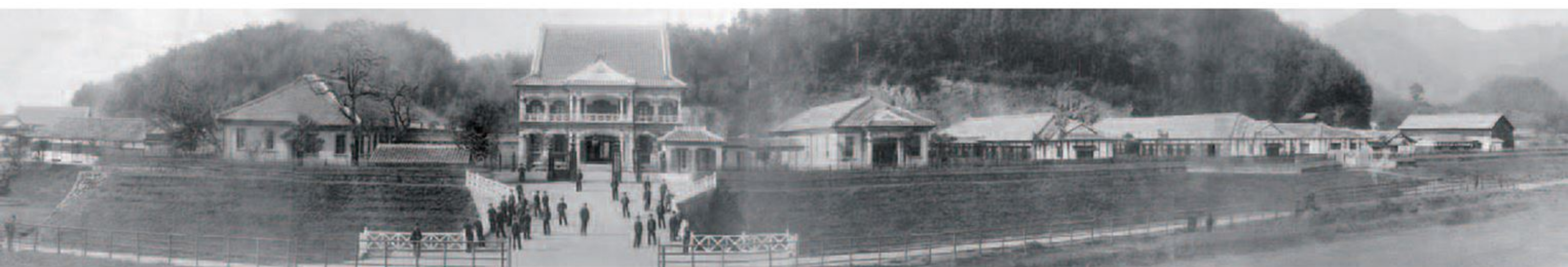
藩主毛利元徳が提唱

この時期の山口県教育史を語るうえで、防長教育会の存在を欠かすことはできない。

明治17(1884)年、山口の学事、特に中等、高等教育の振興をはかることを目的に、長州藩最後の藩主毛利元徳の提唱により、防長教育会は創設された。毛利本家、長府、徳山、清末各家および岩国の吉川家、さらには政官・実業界など県内の有志多数から寄付を募り、明治22年ころには、50万円(現在の金額で50億円をこえると思われる)にも達する基金を集めた。

まず、山口・萩・豊浦・岩国・徳山の五中学校の整備と充実をおこない、その資金を肩代わりし、明治19(1886)年には、県と協議して官立山口高等中学校を設立、年額1万9000円のほか、その超過分も含めた運営費を負担した。

もうひとつの事業は、学生に対する貸費留学制度である。防長教育会の奨学事業は現在にいたるまで続いており、会より学資や宿舍の支援を受け、大学や大学院を卒業した学生の総数は、実に2000名をこえる。旧岩国藩士の家に生まれた経済学者・思想家の河上肇も学資を受けたひとりで、月額8円を受けて東京帝国大学で学んだ。



山口高等中学校全景(明治20年頃)

8

熱意実る! 官立山口高等中学校の設置

一貫した中等教育体系、ようやく実現

明治19(1886)年、「中学校令」が公布される。全国が5学区に分けられ、各学区に1校の高等中学校、すなわち、東京、仙台、京都、金沢、熊本の5校が設置された。

このとき、県当局と防長教育会は政府に請願して、山口中学高等科を「山口高等中学校」に改めた。ぜひとも、県内に高等教育機関をのこしたいとの思いが強かったからである。

ここに、小学校卒業から大学進学にいたるまで9年一貫制の教育体系がととのうこととなった。すなわち、4年間の尋常小学校卒業後、山口高等中学校予備門と呼ばれる5学校(山口・萩・豊浦・徳山・岩国)で4年、そのあと山口高等中学校に進み、予科3年、本科2年の勉強を終えて、大学へ進むという道筋である。

本科には一部(法・文系)、二部(理・工系)の学科を設置し、定員は各部40名(本科全体で80名)、予科が280名であった。

設立当時の職員は、校長以下教官13名と事務関係5名であった。生徒との師弟関係は親密で、昼食を同じ食堂でとり、食後にともに球技に興じる姿もみられた。



亀山公園から運動場を望む

ハウスクネヒトの意見書

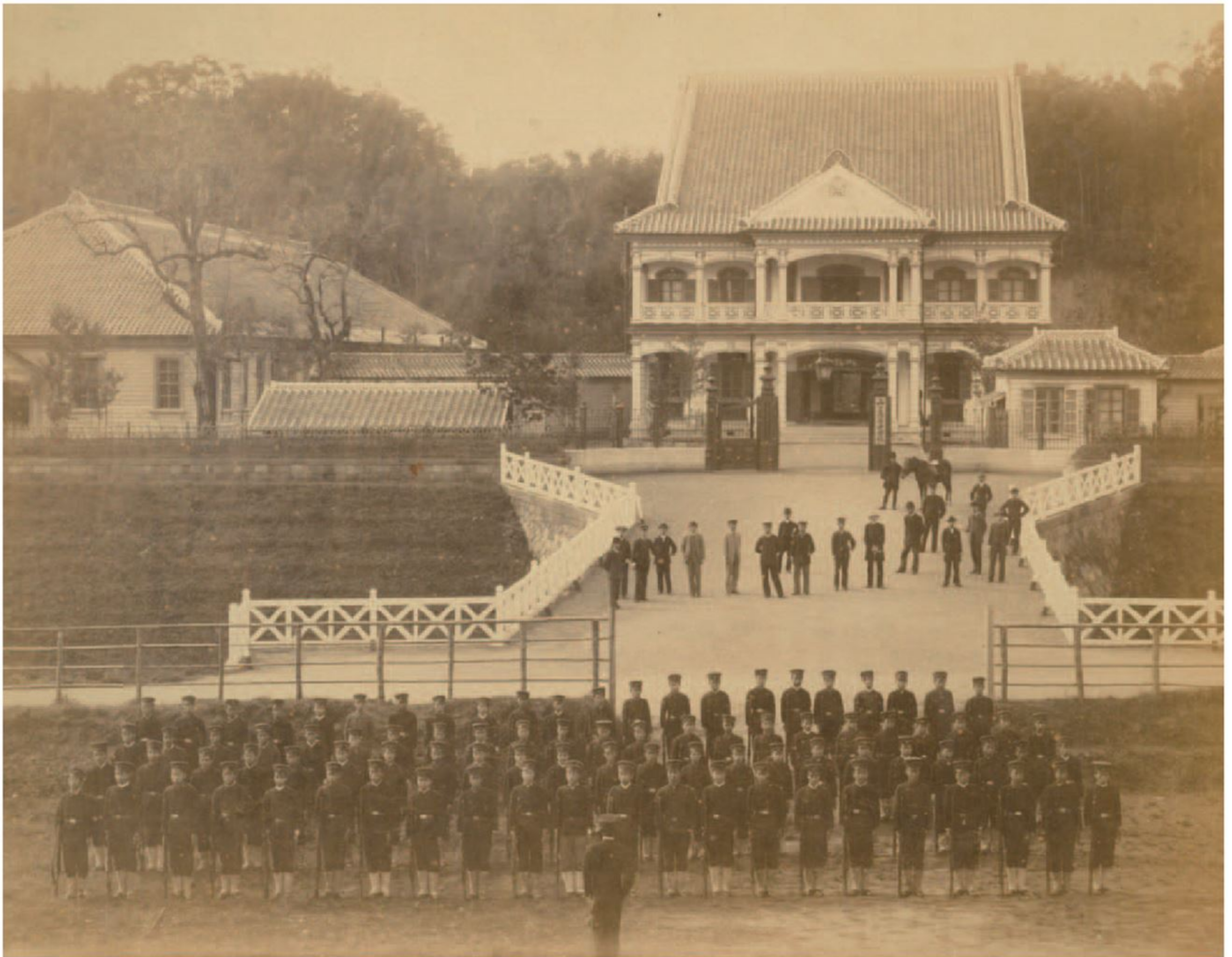
さて、山口高等中学校の教育制度をみるうえで、興味深いひとつの資料がある。

当時、帝国大学の教育学教師であったドイツ人エミール・ハウスクネヒトがまとめた意見書「山口高等学校教則説明書・同附録」である。

井上馨と品川弥二郎に請われ、明治22(1889)年、山口高等中学校を視察したハウスクネヒトは、この意見書のなかで、ドイツのギムナジウム(大学準備のための9年制の中等学校)の制度にならうことを提言する。防長教育会もこれを信頼し、明治23(1890)年には、帝国大学でハウスクネヒトの教えを受けた谷本^{とめり}富を教授に任命し、理論の実施にそなえた。以後、山口高等中学校の経営は、ギムナジウムの制度をとりいれたものとして発展していった。



『山口高等学校教則説明書』



明治20年11月3日天長節記念写真(正門前の体操場にて)

COLUMN

山口高等中学校全景の乾板写真 (山口大学図書館所蔵)

乾板とは、ガラス板に写真乳剤を塗って乾燥させた感光材料で、暗箱カメラによる撮影に用いた。明治15年頃から日本にも輸入されはじめたようで、明治20年頃に撮影されたこの乾板はかなり貴重である。校舎全景は4枚のガラス板に分割して撮影されているが、現在では画像処理技術の発展により、あたかも1枚のパノラマ写真のように再構成することが可能となった。(左上の画像処理は工学部知能情報工学科教員による)



原画を単純接続した場合



山口高等学校予科第1回卒業生と教師たち(明治22年7月)

優秀なる教師陣

校長をはじめとして教官には熱意あふれる人物がむかえられた。

初代校長、河内信朝こうち のぶとも

萩に生まれ、萩、山口の両明倫館に学んで上京、文部省などを経て判事の職についていたところを、在京の県出身者たちに推薦されて、明治16年山口中学校校長となる。高等中学校成立後、引き続き校長をつとめる。教育への熱意と誠実な人柄から、生徒からの信頼も厚かった。



山口高等学校在職時の河内信朝

教頭・数学教師、隈本有尚くまもと ありたか

富士山頂で日本初の気象観測をおこなったほか、日本にマトリックス代数を紹介するなどきわめて優秀な人物で、東京大学予備門では、夏目漱石、正岡子規、秋山真之らに数学を教えていた。正義感が強く厳格な性格から逸話も多く、厳しい授業ぶりには生徒から不満が出ることもあったようだ。夏目漱石の小説『坊っちゃん』に登場する一本気な教師「山嵐」のモデルともいわれている。



隈本有尚



「学友」表紙

学友会と同窓運動会

明治21(1888)年、学術を研究し知識を交換することなどを目的に「学友会」が組織された。翌年創刊された月刊雑誌「学友」には学術論文、文芸、学内の雑報が掲載された。

また、明治22(1889)年には、体育の奨励を目的として「同窓運動会」を創立、2月11日の紀元節には大運動会を開き、以後、春秋に大運動会、毎月遠足登山をおこなうなど、学生の体育向上と心身鍛錬に資することになった。

COLUMN

寄宿舎

通学に不便な生徒のため寄宿舎がもうけられ、改築を経て寮舎をふやした。明治24年当時で宿舎費は無料、^{まかないかた}賄方がつくる食事は1日7銭前後で、1人1日分の米の量は5合1勺だった。食事・入浴・就寝時間以外は自習時間にあてられ、その間、雑談・笑話は禁止、許可なく寝室で休むこともできなかった。また、通俗小説を読むことや囲碁・カルタなどの遊戯も禁じられており、管理は厳しかった。



寄宿舎



寄宿舎の食堂



講堂（「山口高等商業学校卒業アルバム」より）

9

県内初の高校誕生

— 山口高等学校

学制改革により高等学校へ

明治27(1894)年、「高等学校令」が公布され、「高等中学校」は「高等学校」となった。それにより「山口高等中学校」も「山口高等学校」と改称される。当時全国に開設された高等学校は、第一から第五までの高等学校と山口高等学校の6校のみで、これらは帝国大学予科としての性格が強かった。山口高等学校もまた修業年限3年の「大学予科」を設置し、大学の学科に関連して、第一部（法科・文科）、第二部（工科・理科・農科）、第三部（医科）に編成された。

高等学校の入学資格は、尋常中学校を卒業した17歳以上のものであった。全国では、募集人員をこえる場合に選抜試験をおこなっていたが、山口では高等中学校時代からの慣例により、山口県尋常中学校卒業生は、無試験で入学でき授業料が半額だった。

明治28(1895)年には、約200人が生活できる新しい寄宿舍が完成し、かねてより念願だった全寮制が実現した。



山口高等学校管理許可指令書
（「山口高等商業学校沿革史」より）



山口高等学校帽章
（明治28年）



野球をする学生たち
 (「山口高等商業学校卒業アルバム」より)



学友会報

学友会の復興

山口高等中学校が山口高等学校に改称された明治27年は、日清戦争が起こった年であり、時代は軍事色を強めていた。そのため、体操教師として陸軍の予備将校が任用され、体操の授業はもっぱら兵式教練と行軍、発火演習にあてられた。

明治37(1904)年、日露戦争が開戦する。山口高等学校からは、教職員13名が召集され、うち2名が戦死、2名が負傷した。

その一方、高等中学時代にいったん廃止された学友会が復興。運動部の活躍が注目を集めた。明治32(1899)年2月11日、山口高等学校の運動部陸上遠足会が、山口～宮市(防府天満宮)間の約18kmを走破。当時の運動会では長距離走といっても1000m程度だったため、この快挙は「ジャパントイムス」や「時事新報」などでとりあげられた。

野球部では、まちまちだったルールを整理して「野球規則」を制定、県内の各中学校に配り、野球大会を主催した。技術向上にも熱心で、ときには遠征試合をおこなった。特に熊本の第五高等学校とは数度にわたり対戦。善戦したが、ついに勝利は得られなかったようである。

COLUMN

山高の呼び名は3つ

「山口高等学校」と呼ばれる学校は、時代とともに3校ある。

ここに述べた、明治時代に高等中学校の後を受けて成立した官立山口高等学校を「旧旧山高」

大正8年創立の官立山口高等学校を「旧制山高」

戦後生まれた現在の県立高等学校を「山高」

このように呼んで区別している。



群を抜いた帝大進学率

高等学校大学予科を卒業したものは、帝国大学の各分科に無試験で入学できた。しかし、明治29(1896)年の「分科大学通則」の改正にともない、人員をこえる場合は試験をおこなうことになった。

山口高等学校(旧旧山高)12年間での卒業生は累計で832名で、その98%にあたる818名が帝国大学の各分科に進学している。これは他府県の群を抜いた数で、世に注目された。



第5回卒業生 岩田 宙造

光市出身。弁護士、貴族院議員、司法大臣。東京帝国大学法科に進学、高等学校当時の校長、岡田良平や伊藤博文から学費の援助を受け、苦学した。



第8回卒業生 河上 肇

岩国市出身。経済学者、社会思想家。東京帝国大学法科に進学。「社会主義評論」を新聞に連載、マルクス経済学を研究した。昭和8-12年、治安維持法違反により入獄。



第10回卒業生 鮎川 義介

山口市出身。実業家、政治家。東京帝国大学工科に進学。芝浦製作所(現在の東芝)に職工として入社したのち渡米、帰国後起業し、のちに日産コンツェルンを形成した。



明治末頃の山口



山口高等中学校時代を含めて三度校長を務めた河内信朝先生を讃え、昭和9年に銅像が建てられた。

旧山高の終局

全国的に高等教育熱が高まりだした明治30年ころから、入学志願者が急増する。そのため文部省は、各高等学校の入学制度に統制を加えるようになった。

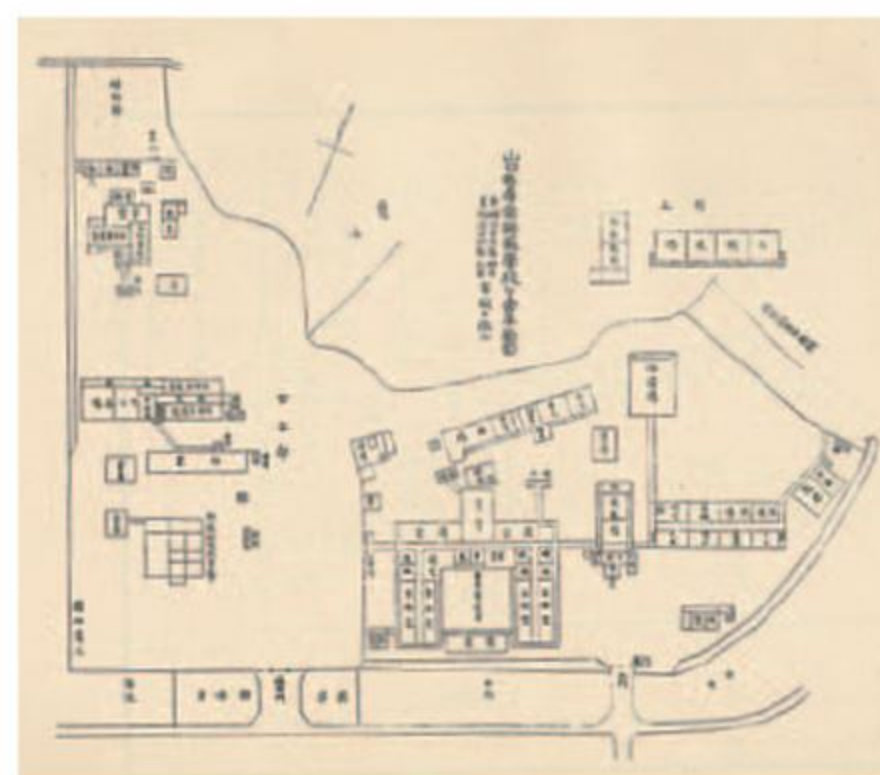
明治35(1902)年からは全国で共通選抜試験が実施され、合格者の志望と試験成績によって入学する学校が決められることになった。これにより、明治37年には、山口高等学校生徒中、県内出身者は20%足らずとなる。

山口県の教育振興を主旨として設立され、入学・授業料の両面で県内の子弟を優遇してきた防長教育会であったが、その方針が時代に合わなくなり、また、入学者の増加や物価高騰により経済的な負担に苦しむようになる。

明治38(1905)年、ついに学校経営を断念、経費をすべて国庫に移した。同年7月、最後の卒業式をおこない、山口高等中学校につらなる山口高等学校は19年にわたる歴史に幕をおろした。その後は、官立山口高等商業学校として引き継がれることになる。



山口県尋常師範学校校舎(明治時代)



山口県尋常師範学校校舎平面図(明治24年頃)



第1回山口県師範学校運動会(明治34年ごろ)

10

教える道の発祥、師範学校

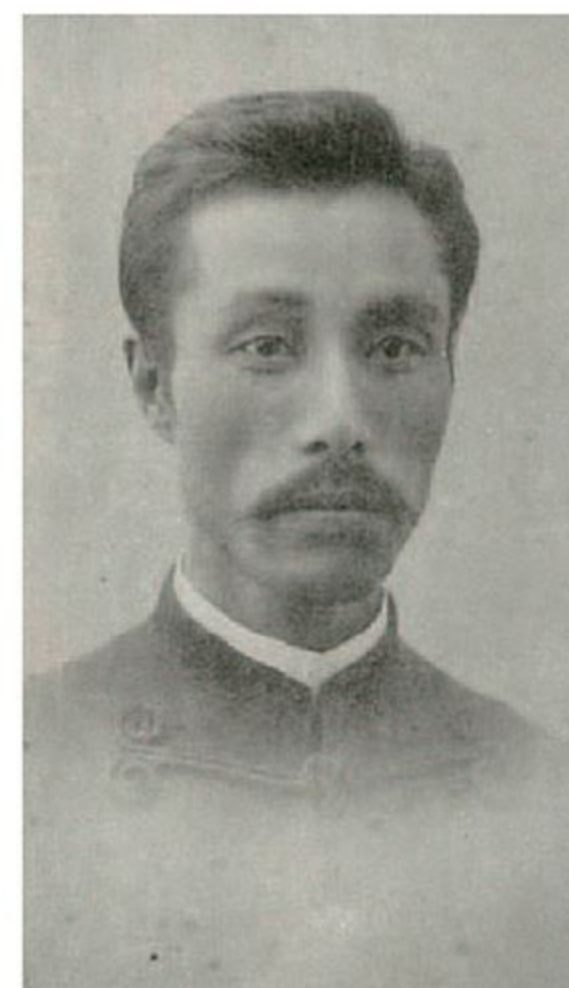
師範教育の確立へ

明治7(1874)年、山口と岩国に**教員試験所**が設置され、授業の伝授がおこなわれる。同年、文部省に届け出て旧山口明倫館の隣(現在の山口市役所附近)に「**山口県教員養成所**」を開設、本県における師範教育のはじまりとなる。

明治10(1877)年、政府は官立の師範学校を東京のみとし、それ以外は地方に設立をまかせた。県は教員養成所を「**山口県師範学校**」と改称、初代校長に長屋又輔を任命し、修業年限1年半として文学、数学、史学など11科目を教授した。明治17(1884)年には3年制の女子師範学科が併設される(明治28年廃止)。明治18(1885)年、「**山口師範学校**」に改称。

明治19(1886)年4月「師範学校令」が公布され、師範学校は小学校教員を養成する「**尋常師範学校**」と尋常師範学校・尋常中学校の教員を養成する「**高等師範学校**」(官立で東京に1校のみ)に分けられた。これが、戦後の新学制まで続く日本の教員養成の原型となった。山口師範学校は「**山口県尋常師範学校**」と改称され、修業年限4年で、倫理、教育、国語など19科目を教授、全寮制による軍隊式管理をおこなった。

明治31(1898)年、師範教育令の制定を受け、「**山口県師範学校**」と改称された。



山口県師範学校 上司 淵蔵 校長

明治16年に長屋校長の後を受けて校長に就任した。教員養成所設立当初からの9年間、学校長として13年間の計22年の在任に及び「山口師範育ての親」として評価されている。



冰上校舍全景

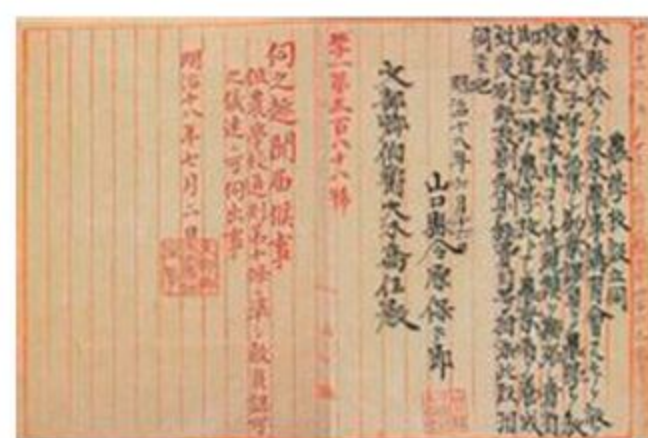


農学校通則(明治16年)

11

農業教育のめばえ

— 農学校



農学校設立伺(「小郡農業学校100年誌」より)

学制による農業教育

明治16(1883)年、県は、山口上宇野令(現在の山口市民会館の地)にあった栽培試験場に**農事講習会**を開設し、農家の子弟に農業教育をおこなうようになった。翌年には、獣疫の流行から獣医の必要に迫られ、**獣医講習会**を併設した。明治18(1885)年、両講習会を廃止し、同じ場所に「**山口県山口農学校**」を開設、獣医科も併設された。入学者は小学中等科を卒業した15歳以上のもので、修業を2年とし、実務者の養成を目的に教育をおこなった。明治23(1890)年には、大内村氷上に移転する。

その後、度重なる教育制度の改変で、校名、修業年限、定員などが変わっていく。

明治28(1895)年、氷上校舎に「山口県簡易農学校」を併設するが、3年で農学校に併合。さらに明治32(1899)年、「実業学校令」の制定に伴い、農学校は「山口県農業学校」と改称された。明治43(1910)年には氷上から吉敷郡小郡町に移った。

こうして県で最初の実業学校としてスタートした農学校は、国の実業教育の改革と軌を一にしつつ、山口県の農業教育に大きな功績をのこした。



開校式記念撮影

12

山口高等商業学校の成立



旧旧山高から引き継いだ校舎本館

全国3番目の官立高商

明治30年代、日清戦争後の日本では産業が発展し、実業教育振興の機が熟していた。相次いで実業学校が設立され、明治36(1903)年には「専門学校令」が制定される。

そのような時代のなか、政府は、国庫に移管された山口高等学校(旧旧山高)を「高等商業学校」(高商)に変更することを決定する。こうして、明治38(1905)年4月、官立の「山口高等商業学校」が、東京高商、神戸高商につぐ全国で3番目の高商として誕生した。同年誕生した長崎高商よりほんの一足早かったわけだが、「全国で3番目」は名声を高める要因となり、山口高商生の誇りでもあった。

第1回入学者は101名で、5月8日に入学式がおこなわれた。また、2年後の明治40(1907)年5月8日には、防長教育会会長、山口県知事ら130余名の来賓をむかえ、開校式が盛大におこなわれた。夜には校舎をイルミネーションで照らし、花火がうちあげられた。職員生徒・来賓が「高商」の文字を染めた提灯を手に市内をめぐる行列は4時間におよんだという。いわば時代の花形である「高商」の誕生を、地元をあげて歓迎したのである。



校門



開校時帽章



実践室 山口高商は他の高商にさきがけてタイプライターを導入した



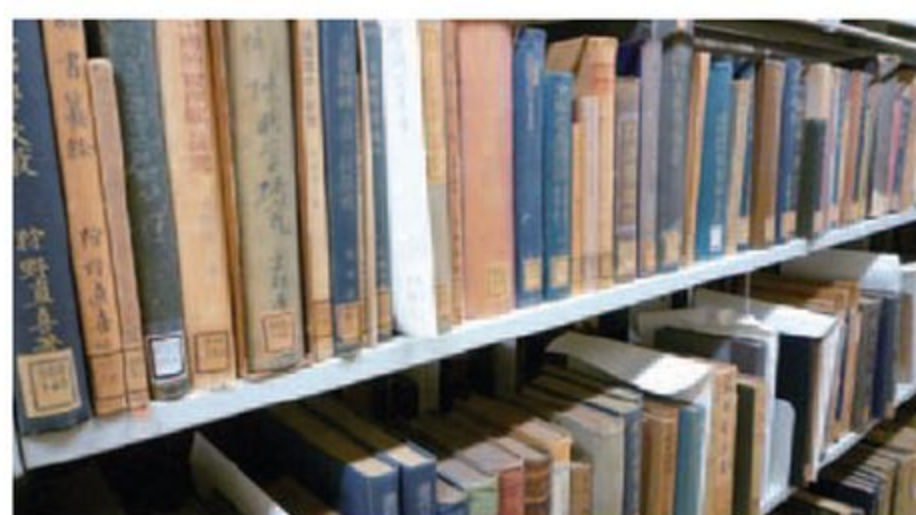
図書館閲覧室



図書館書庫外観



当時の商品陳列室



経済学部東亜経済研究所書庫に保存されている当時の図書



現在の商品資料館
商品標本は現在も商品資料館に継承されている。
右の黒い建物は東亜経済研究所

図書室、商品陳列室の充実

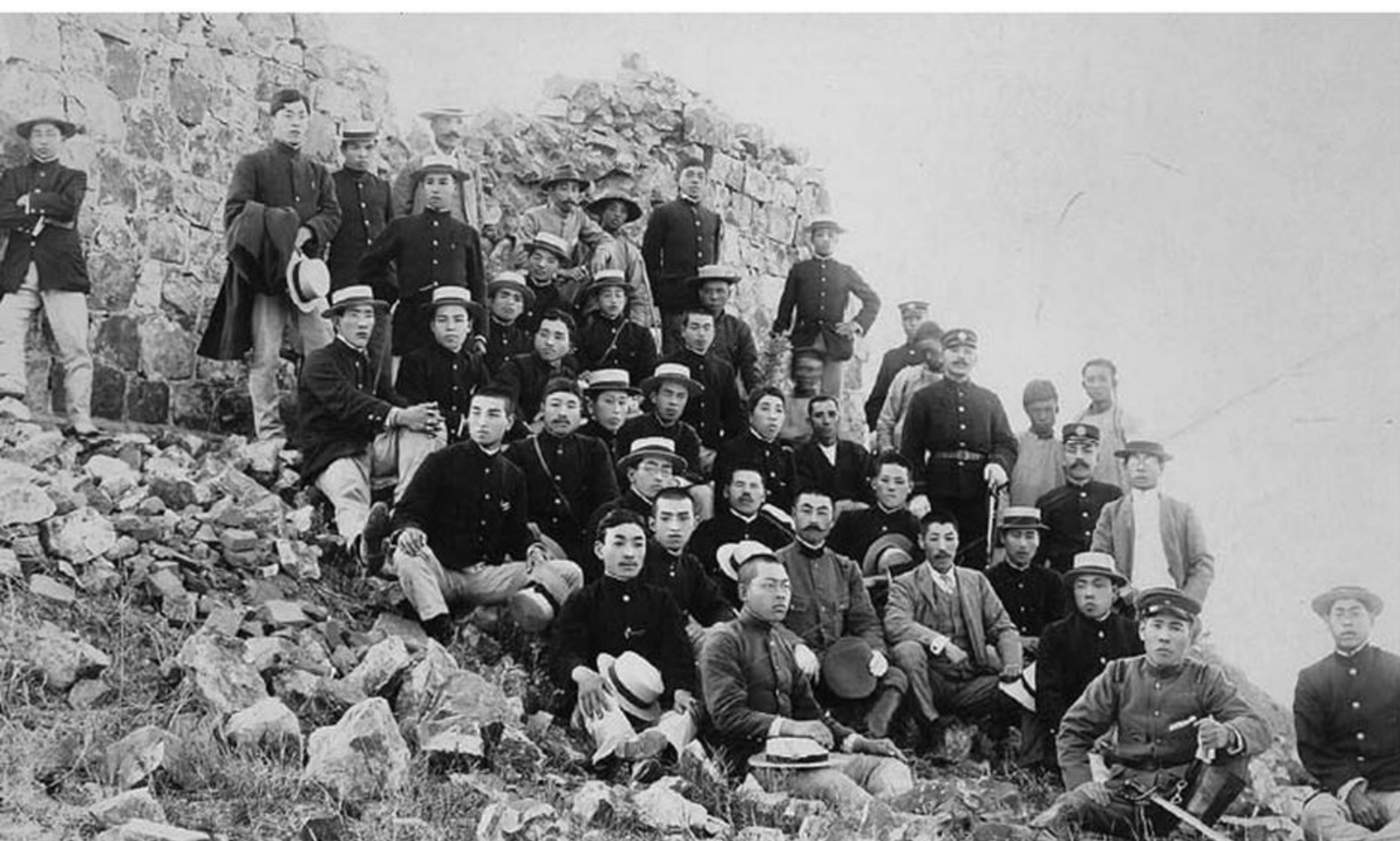
開校式の式辞で松本源太郎初代校長が4か条の教育方針を述べているが、そのなかで注目されるのが、次の2項である。

- 第一 高等商業学校トシテノ本校ハ徒ラニ深遠ナル空理ニ馳セス実際ニ重キヲ置クヘキコト
- 第三 本校ノ卒業生ハ成ルヘク満韓地方ノ実業ニ従事セシムル目的ヲ以テ教育スルコト

第一項を反映して、授業科目は旧山高時代から大きく転換、商法や商業学、商品学などに重点が置かれることになった。これにともない、施設の充実が急務となる。

まず、防長教育会から臨時に寄付金を受け、商業・経済・法律関係の専門書を収集。海外留学する教官に現金を持たせ、洋書を購入させた。増加する図書のために明治43(1910)年には書庫を増築している。

また商品学の施設として、教室を改造して商品学講義室と商品陳列室をもうけた。ここに陳列する商品標本は、教官が出張の際に購入したり、生徒に寄贈を呼びかけたりして集め、大正4(1915)年末には、6,629点(時価13,244円余り)をそろえることができた。



大陸への修学旅行(旅順 松樹山砲台にて)



支那貿易科研究室



大陸への修学旅行(蘇州 寒山寺にて)



貿易別科 臨海学校の様子
修業年限が1年と短いため、夏季休暇を利用して特訓を行った。



外国語の授業

満韓経営への人材育成

教育方針の第三項にみるように「満韓地方ノ実業」を重視した山口高商だが、時局に応じて、その地域を中国（支那）にも拡大していった。

大正から昭和にかけ、「支那貿易講習科」（その後、「支那貿易科」、さらに「東亜経済研究科」と改称）、「貿易別科」、「支那科」を新設して、中国・南洋貿易で活躍する人材を育てたほか、「東亜経済研究会」（大正6年）と「東亜経済研究所」（同10年「調査部」として設置。昭和8年に改称）を設立して、東アジア経済の研究に力をそそいだ。

東亜経済研究会と東亜経済研究所は一体となって、研究のための資料を調査・収集するとともに、研究会や講習会を開催し、書籍や機関誌「東亜経済研究」を発行した。この「東亜経済研究」には、執筆者として山口高商や帝国大学の教授、満鉄調査部職員らが名をつらねており、最高の研究水準をしめすものだった。

注目をあびたのは、明治40年から大正12年までおこなった満韓修学旅行である。30日程度の行程で中国、朝鮮各地の商店や工場を見学し、実業界の講演を聞いた。外国旅行をおこなう実業専門学校はほかになく、カンカン帽姿での修学旅行は山口高商名物になったという。



記念祝賀式当日の正門



祝賀式



ポスター展覧会



土産品展覧会



記念大運動会



提灯行列



広告祭



大音楽会



ポスター

高商改称30周年

昭和10(1935)年、山口高商は改称30周年をむかえた。祝賀式には、九州帝国大学総長や公爵毛利元昭代理、山口県知事、京都帝国大学法学部長らを来賓に招き、参列者は1300人にもものぼった。

また、各種の記念事業もおこなわれた。主なものをあげても、日本経営学会山口大会を招致しての公開講演会や研究懇談会などの開催、沿革史展覧会・図書館展覧会・ポスター展覧会・土産品展覧会など各種展覧会、大音楽会の開催、そして、記念大運動会や長崎と大分の高商をむかえての野球リーグ戦開催など、多岐にわたった。

学校、生徒だけでなく、市民が参加して祝賀を盛りあげたことも特筆されるだろう。提灯行列では市内の諸学校や一般市民も行進して高商運動場へ。山口市商工会では広告祭を挙行し、商品を広告する仮装行列をおこなって、市民の目をおどろかせた。

記念出版としては、記念論文集や経営学論集、『山口高等商業学校沿革史』をまとめた。



「昇格か廃校か」と書かれた旗を掲げ町内を行進する生徒たち

大学昇格運動 ― 幻の防長大学

大正9(1920)年に東京高商が大学に昇格した。その前々年に公布された「大学令」で単科大学が認められたため、ほかにも神戸高商など5校の大学昇格案が報じられた。

この動きに山口高商生も鋭く反応し、同年11月、400名余りの生徒が亀山公園に集まり学生大会を開催、山口高商の大学昇格を期して、血判状に名前をつらね、山口町内を練り歩いた。さらに実行委員10名が決議文を携えて上京、有力者への協力要請もおこなった。

学校側も「商科大学に昇格し、法学部を併置して総合大学とする」という「防長大学設立趣意書」をまとめ、校長・教授が上京した。しかし結局、運動は実らなかった。研究科設置の承認を得たが、関東大震災に見舞われ、その財政難のあおりを受けて見送られてしまったのである。その後も運動を継続したが、ついに日の目をみることはなかった。

学生生活 ― 学友会と鳳陽寮

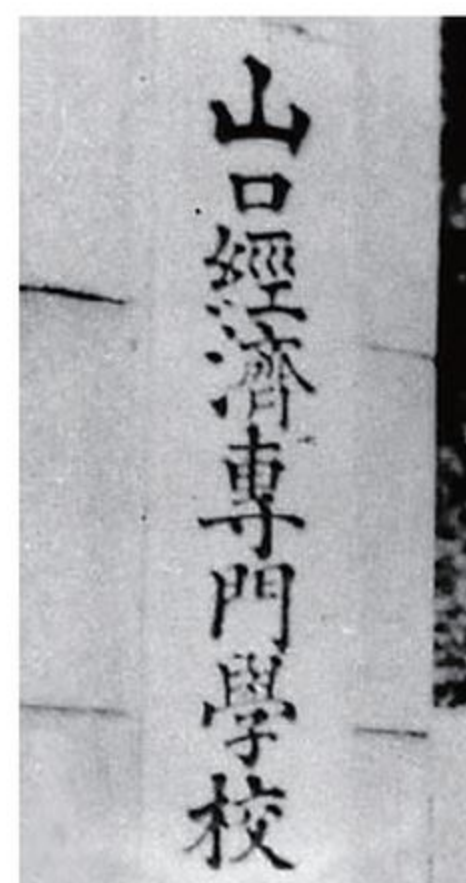
明治後期、山口高商への移行期に学友会を構成した部は、邦語講談会、英独講談会、剣術会、柔術会、ベースボール部、ローンテニス会の6部だった。大正期には、「商学研究会」が結成され、「商学研究雑誌」を発行、また、生徒の意見発表の場として、「山口高商新聞」も発行された。昭和期に入ると部は急速に増えて、学友会所属の部は23部(文化部6、運動部17)にのぼった。

旧旧山高のものを引き継いだ寄宿舎は、大正11(1922)年に「鳳陽寮」と名づけられた。昭和4(1929)年には5棟の寮舎と建物を新築、東中寮ではベッドが使用され、当時としては画期的だった。

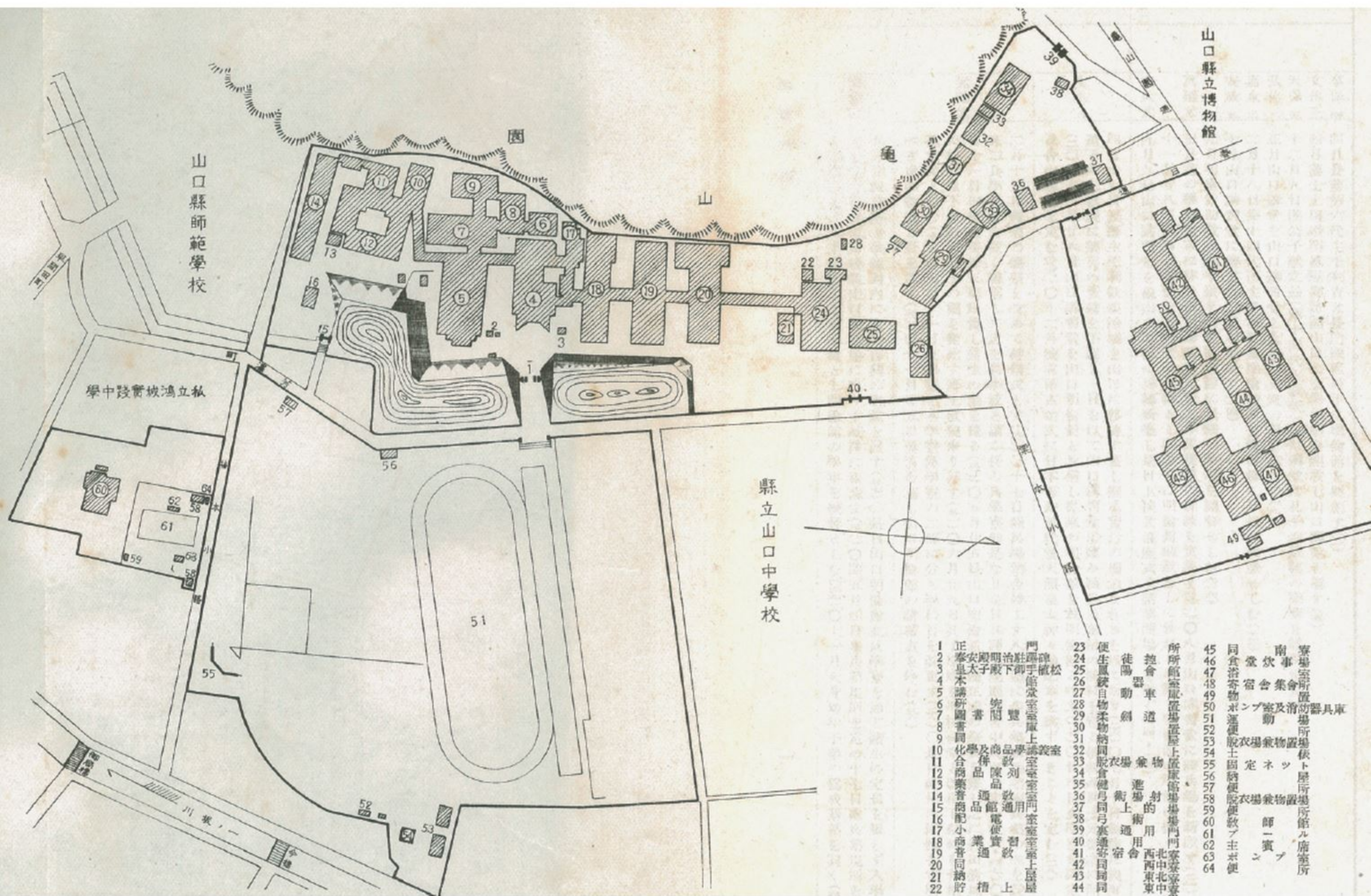
経済専門学校へと改称

昭和16(1941)年における卒業生の就職状況を見ると、まず、就職率が高いのは、当然ながら、商業金融関係である。次いで鉱工業(経理や企業会計部門に採用されたと考えられる)で、三井、三菱、住友など財閥系企業や日産コンツェルン系列などの大企業が就職先となっている。また、南満州鉄道、朝鮮銀行、東洋拓殖などに採用され、外地へ赴任したものも多かった。進学先の上級学校は、九州帝国大学、東京商科大学、神戸商科大学などとなっている。

昭和19(1944)年、全国の高等商業学校、商科大学から、「商業」の呼称が消されることになり、山口高等商業学校は「山口経済専門学校」へと改称された。



山口経済専門学校門標



山口高商平面図(昭和14年ころ)



山口高商新聞



寮生の居室



鳳陽寮(昭和4年3月新築)



広告研究会 会誌



排球部



スーパ会議



自動車練習



山口中学校校舎(現在の山口県立山口図書館付近)

13

山口高等学校の再興

山口県への高等学校誘致運動

旧山口高等学校が廃校となって以来、県下から大学へ進学することがきわめて不便となっていた。大学進学のためには他県の高等学校に入学しなければならず、これが経済的に大きな負担だったのである。みかねた在京の卒業生らは、母校の復活を政府に請願していたが、なかなか見通しがつくものではなかった。

しかし、大正期に入り、全国で高等学校への入学希望者が増え、産業界から優秀な人材をもとめる声が高まると、いよいよ政府は、高等学校4校の新設を決めた。

これを受けて、山口県を含め全国で誘致運動が起こった。設立のための地元負担金は約55万円。この時代としては莫大な金額だが、防長教育会、卒業生、毛利氏、財界人、山口町などが力を尽して59万円以上をあつめ、ついに、山口県に1校を設置することが承認された。

こうして、大正8(1919)年4月、「高等学校令」により、山口県山口町に念願の官立山口高等学校が設立された。この時新設されたのは山口、新潟、松本、松山の4校。それまでにあった第一高等学校から第八高等学校までの8校を合わせ、官立高等学校は12校となった。

設立資金内訳

防長教育会	200,000円
久原 房之助	80,000円
藤田 平太郎	80,000円
藤田 政輔	40,000円
毛利氏	100,000円
山口町(敷地用)	60,000円
山口県予算	37,000円
計	597,000円



代用学生寮となった山口師範学校女子部寄宿舎跡(下笠小路)



新保寅次校長

旧制山高始動！

初代校長には、鹿児島県立第二中学校長であった新保寅次がつき、開校の準備がすすめられた。校舎の建設が間に合わなかったため、当面、県立山口中学校（現在の山口県立山口図書館の敷地）の一部を仮校舎とすることになった。また、町内に4か所の代用学生寮を置いた。7月、身体検査と7科目の学科による入学試験で、669名の受験者から160名の入学者が選ばれ、9月、山口中学校講堂において第1回入学宣誓式がおこなわれた。

修業年限は3年、「文科」と「理科」に分かれ、さらに第1外国語の選択により、「甲類」（英語選択）と「乙類」（ドイツ語選択）のクラスに分かれた。文科、理科ともに外国語教育に重点をおいたのは、旧高等学校令以来の伝統でもある。



校章

COLUMN

初代校長 新保寅次

新保校長は、新潟県生まれ。東京の一高出身だったが、旧制山高生には、一高、三高を凌駕せよとハッパをかけた。このころの学生はバンカラをきどり、時にはハメをはずし不始末をしでかすこともあったが、新保校長は、寛大に接し、常に学生の自主自立を尊重した。このような校長を、学生たちは「親爺」と呼んで慕い、転任の際には留任運動が起こったほどである。



校舎本館(玄関)



講堂



現在の講堂(県立山口高等学校内)平成18年改築
現在、記念館として県立山口高等学校の敷地内に残り、
管弦楽部の部室として使用されている。



落成式



寄宿舍(鴻南寮)

校舎の建築と火事による焼失

開校から1年後の大正9(1920)年8月、山口町宇野令糸米(現在の県立山口高等学校の敷地)に、まず、校舎本館と寄宿舍(鴻南寮)3棟が完成し、9月1日、山口中学校の仮校舎から移転した。その後、特別教室、講堂なども、引き続いて完成してゆき、大正11(1922)年4月にすべての建築工事が終了した。

5月16日、新しい講堂でおこなわれた校舎落成式には、文部省学務課長、山口県知事、毛利元昭公爵ほか、地元各界の来賓250名がまねかれ、校舎の完成を盛大に祝った。

しかし、それから14年後の昭和11(1936)年、校舎は災難にみまわれる。10月29日未明、本館2階から出火した火災で、本館を焼失してしまったのである。重要書類や調度品の大部分は運び出されたが、十数年にわたって県下から発掘、収集していた考古学資料や歴史資料が焼失してしまったのは、まことに残念なことであった。

火災後は、体操場や他の教室が本館の代用として使われ、翌年6月には、新校舎が完成した。



鴻南寮・新聞閲覧室



校内売店



当時流行したバンカラなスタイルの学生たち



陸上部



新保校長の銅像の前で

バンカラな学生生活

旧旧山高の廃校から14年という空隙があったためか、設立当初の旧制山高には、伝統にしばられるという悪弊がなく、自分らで校風をつくっていかうという開拓精神が息づいていた。学生たちは自治と自由を尊び、勉学やスポーツだけでなく、学校行事や校友会活動も活発におこなった。

毎年秋には創立記念祭が催され、運動会や余興、運動部の大会や展覧会のほか、寮の飾り付け、提灯行列でにぎわった。

運動部と文化部からなる校友会には、学芸、弁論、野球、剣道、蹴球（サッカー）、水泳などの部が属し、なかでも野球部は、松山高等学校との親善試合を大正9（1920）年から昭和22（1947）年までおこない、山高では全校をあげて応援に出向くほどの一大イベントとなっていた。

文化部が発行した会誌には、この時代を反映して、戦争の影響や左翼的な動向もみられ、時代とともに変化してゆく当時の学生の思想をとらえることができる。

COLUMN

金メダリスト 田島直人選手

昭和4（1929）年から3年間、旧制山高に在学し、陸上部の花形選手だった田島直人は、昭和11（1936）年のベルリンオリンピックで、三段跳びに出場し、世界新記録となる16mを跳んで金メダルを獲得した。この快挙に母校、旧制山高の教授、生徒は大いに沸いた。オリンピックで贈られたオークの苗木は京都大学に植えられ、その実から育てた苗木が、現在の県立山口高等学校にも植樹されている。



山口県女子師範学校全景(大正9年頃)



明治28年に完成した山口県尋常師範学校本館(昭和2年焼失)



山口県師範学校正門



山口県室積師範学校正門



昭和4年に完成した山口県師範学校本館

14

山口県師範学校



東京への修学旅行(二重橋の前にて)

山口県室積師範学校の開設 ― 二師範時代の開幕

師範学校は授業料が無償で、学費も支給するなど、経済的な事情から進学を断念したものにも、勉学への門戸をひらいていた。明治のはじめに教員養成所から出発し、多くの卒業生を小学校の教壇に送った山口の師範教育。その流れをおおまかにたどってみよう。

明治31(1898)年、山口県尋常師範学校を「山口県師範学校」へと改称。

大正3(1914)年、室積の県立工業学校を転用して山口県室積師範学校が開校(現在の教育学部附属光小・中学校の敷地)。山口県師範学校は「山口県山口師範学校」へと改称し、県には2つの師範学校が並び立つことになった。

大正9(1920)年、室積に山口県女子師範学校が設立された。これにより室積師範学校は廃止される。山口県山口師範学校は再び改称され、「山口県師範学校」となる。

昭和18(1943)年、「師範教育令」の改正により、師範学校は高等専門学校に昇格することになった。これにより、山口県師範学校と山口県女子師範学校は統合され、官立山口師範学校に昇格された。この官立への昇格が、のちの山口大学教育学部へとつながっていく。



室積師範学校の制服
(「室積師範学校一覧」より)



明治34年4月に完成した寄宿舍



寄宿舍自習室



教育実習の様子



鎌倉への修学旅行



奉公塾の塾舎



相撲部

学校生活 — 教師育成の場として

当初から師範学校は全寮制であり、師範教育の充実とともに寄宿舍の整備も進んだ。山口尋常中学校（現在の山口市市民会館の場所）移転後の建物を増改築して、明治34（1901）年4月には、寄宿舍3棟と食堂が完成。玄関と道路の間に広場があり、テニスコートや器械体操具を配した、ハイカラな建物であった。

明治36（1903）年に創設された校友会では文化部、運動部が活動し、心身の強化鍛錬という立場から運動部の活動はとくに奨励された。おなじく心身の修養鍛錬を目的に、明治38（1905）年からは、樫野川や室積湾で水泳鍛錬がおこなわれた。

附属小学校の訓導（正教員）の指導の下、70日間にわたる教育実習は、学習の総仕上げであり、その間は、猛勉強する生徒で深夜まで寮の明かりが消えなかったという。

最終学年の5月には、9日間の修学旅行があった。昭和15（1940）年の旅行では、東京、京都、大阪の「三府」と、奈良、鎌倉を見学し、9日目の朝6時ごろ帰ったようである。

昭和14（1939）年から18（1943）年ころまで、山口市内の法泉寺（現在の滝町の辺り）に田地と農家を借り受け、「奉公塾」が開設された。生徒はここに1週間入塾して、農地の開墾や作物の植え付けなどに従事した。



記念運動会の模様



記念式典で式辞を読む山本昇校長



記念運動会の模様



祝賀会



郷土展覧会の様子

校 訓

教育ニ関スル勅語ノ
聖旨ヲ奉体シ、
敬虔報謝ノ念ヲ培イ、
自治協同事ニ当リ、
勤勞奉仕ニ努メ、
質実剛健ナル精神ヲ養ヒ、
之ヲ貫クニ至誠ヲ以テシ、
以テ天壤無窮ニ皇運ヲ
扶翼シ奉ルコトヲ
得ヘキ善良有為ノ
国民教育者タラムコトヲ期ス

創立60周年記念事業

山口県における師範学校の前身である山口県教員養成所の開設から、60周年にあたる昭和9（1934）年10月、当時の金額で総額3540円を投じ、創立60周年の記念式典が挙行された。

創立記念式と記念祝賀会のほか、60年史の刊行、校訓・校歌の制定、記念運動会、記念学芸会、郷土展覧会など多彩な行事がおこなわれた。

校訓は、山本昇校長により、これまで培われてきた伝統をもとに制定された。戦前の師範教育の中核をなした「師道の錬成」がうたわれ、当時の山口県師範学校の教育目標を如実にあらわしたものとなっている。生徒はこれを暗唱し、ことあるごとに斉唱したという。



校旗



教官・学生集合写真



校庭に整列する学生



漁をする学生



農作業風景



農作業風景



山口県立青年学校教員養成所



実業補習学校農業科教員養成所の門

青年師範学校 — 実業教育の教員を養成

明治時代、日清・日露戦争を契機として国の経済が発展すると、産業に従事する勤労青少年の教育が急がれるようになった。彼らに実業教育と普通教育の補習をおこなう学校として生まれたのが、「実業補習学校」である。

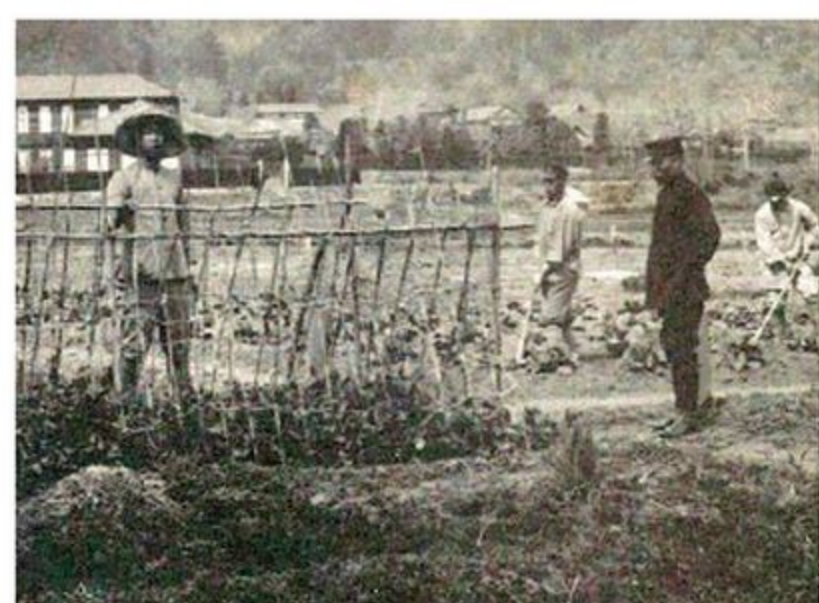
この学校の農業科専任教員を養成するため、山口県山口師範学校におかれた農業教員養成所が、のちの青年師範学校へつながる源流である。

一方、第一次大戦後、勤労青年に対して軍事教育を施す「青年訓練所」が設置された。昭和10(1935)年になって、この2校、実業補習学校と青年訓練所は統合され、勤労青年に中等教育程度の教育をおこなう定時制の学校、「青年学校」が生まれる。

明治時代の農業教員養成所は、幾度かの改編を経て、この青年学校で教える教員の養成所となり、昭和16(1941)年、女子部をもつ山口県立青年学校教員養成所として防府の三田尻(現在の桑山)に移転した。昭和19(1944)年、「師範学校令」の改正にともない、養成所は官立山口青年師範学校となった。官立への昇格で、青年教育の飛躍が期待されたが、残念ながら、大きな成果をあげることなく戦後を迎えることになった。



山口県立小郡農業学校 山手校舎全景



農科蔬菜実習



林科害虫駆除実習



明治43年に完成した寄宿舍
(『山口県立山口農業学校百年史』より)

15

農業教育の発展



品評会

山口県立小郡農業学校 一 県の農業教育の中核

明治43(1910)年に、小郡町に移転した山口県立農業学校は、県の農業教育の中心として発展していた。

大正12(1923)年、「山口県立小郡農業学校」と改称。昭和19(1944)年に、山口県立小郡高等女学校を統合した。戦後は、昭和23(1948)年の学制発布により、「山口県立山口農業高等学校」と改称し、新制高等学校として歴史をあゆんでいくこととなる。

大正時代から戦前までの農業教育は、以下のような内容であった。

分科は農、林、養蚕、獣医畜産の4科で、授業は、午前に学科、午後に実習というかたちでおこなわれていた。カーキ色で折り襟の上下服、ゲートル地下足袋姿が、お決まりの実習服であった。

大正時代、農業学校での教育には徳性や人格の陶冶も織り込まれていたから、寄宿舍での生活はきびしく指導され、訓育や勤労作業が重視されていた。



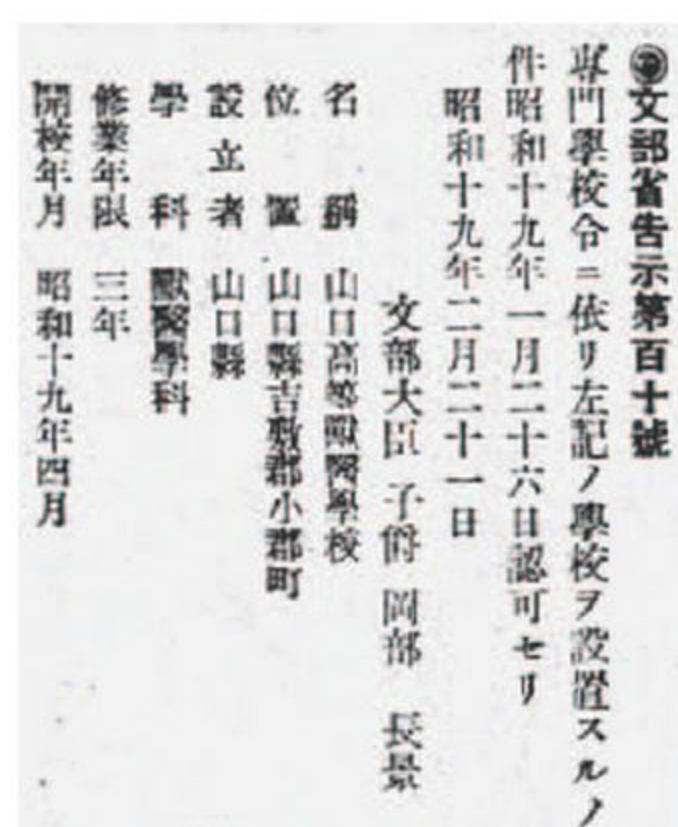
家畜舎（『山口農業高等学校100年史』より）



山口高等獣医学校仮校舎（小郡高等女学校校舎）



山口高等獣医学校仮校舎（小郡高等女学校校舎）

山口高等獣医学校設置認可の告示
(文部省告示第110号)

16

獣医教育の再興

山口高等獣医学校の創設と山口獣医専門学校への改称

昭和に入ると、農業学校の獣医畜産科に大きな変化がおこる。

従来、獣医師免許は、農業学校卒業生には無試験で交付されていたが、大正15(1926)年の「獣医師法」により、専門学校以上の卒業生でないと交付されないことになってしまった。

このため、山口県立小郡農業学校では、県下唯一の獣医師養成機関であった獣医畜産科の獣医部門を、昭和11(1936)年、いったん廃止する。その後、第二部獣医科を新設し、獣医師試験の受験資格が得られるようにした。

昭和19(1944)年、この第二部獣医科を専門学校として独立させることとなった。終戦直前の財政難の時期であったが、県から140万円、小郡町から70万円(現在の金額で約90億円)という巨額を支出し、同年4月、**山口県立山口高等獣医学校**が誕生した。卒業者は、高等学校2級、中学校1級の教諭(生物、理科、畜産、保健)免許と、無試験で獣医師免許証を取得することができた。

太平洋戦争の状況は日を追って悪化しており、開校はしたものの、校舎新築はならず、当初は小郡農業学校に同居、3か月後には、移転した小郡高等女学校の校舎を仮校舎とした。

昭和20(1945)年、「**山口獣医畜産専門学校**」と改称。昭和23(1948)年末に下関市長府校舎へ移転し、翌年新制山口大学に移行することとなる。

山口高等獣医学校
(山口獣医畜産専門学校)跡

移転感謝祭(昭和24年3月)



昭和13年頃の宇部市



開校当時の下松工業学校(『久原房之助』より)

17

工業教育のめばえ

官立高等工業学校を誘致

明治30年代、国内では産業が飛躍的に発展し、工業教育が重要度を増してくる。

山口県では、明治36(1903)年、室積に、造船と機械工業従事者を養成する県立工業学校が設置されたが、大正3(1914)年には廃校となった。

その後、郷土の産業人の支援を受け、県立工業学校が再び設置される。県は、宇部共同義会から寄付金30万円を受け、大正10(1921)年、宇部に山口県立宇部工業学校を設立。同年、実業家久原房之介からの33万円の寄付により、下松に、山口県立下松工業学校が設立された。

昭和13(1938)年、戦局が拡大するなか、技術者の拡充をはかるため、文部省は7つの官立高等工業学校を新設することとした。そのうち1校が山口県につくられることになり、これに、新進工業都市として発展しつつあった宇部市が名乗りをあげる。

建設用地として高台に約4万坪という広大な土地(現在の常盤台)が確保され、宇部市、地元企業からの寄付と県の資金をもとに、昭和14(1939)年、**官立宇部高等工業学校**が誕生した。



渡辺祐策(『素行渡辺祐策翁』より)

宇部共同義会と渡辺祐策

COLUMN

明治19(1886)年、炭鉱の採掘権を共同で管理するために設立された宇部共同義会は、石炭需要の高まりにつれ、大きな財団に成長し、宇部の公共施設、社会福祉、教育文化に巨額の寄付をした。小学校の講堂や村立中学校の建設、県立宇部工業学校の誘致などに財を投じ、宇部高等工業学校創設では、建設用地を用意した。

渡辺祐策は、宇部共同義会中、最も成長した沖ノ山炭鉱(のちの宇部興産)の頭取で、私立の工業学校を設立するなど教育機関や社会基盤の整備に尽力し、宇部村発展に大きく貢献した。



完成した新校舎



鵜之島の仮校舎



講義風景(昭和16年頃)



化学天秤測定(昭和17年頃)



常盤台新校舎への移転

官立宇部高等工業学校の発展



福井私城校長

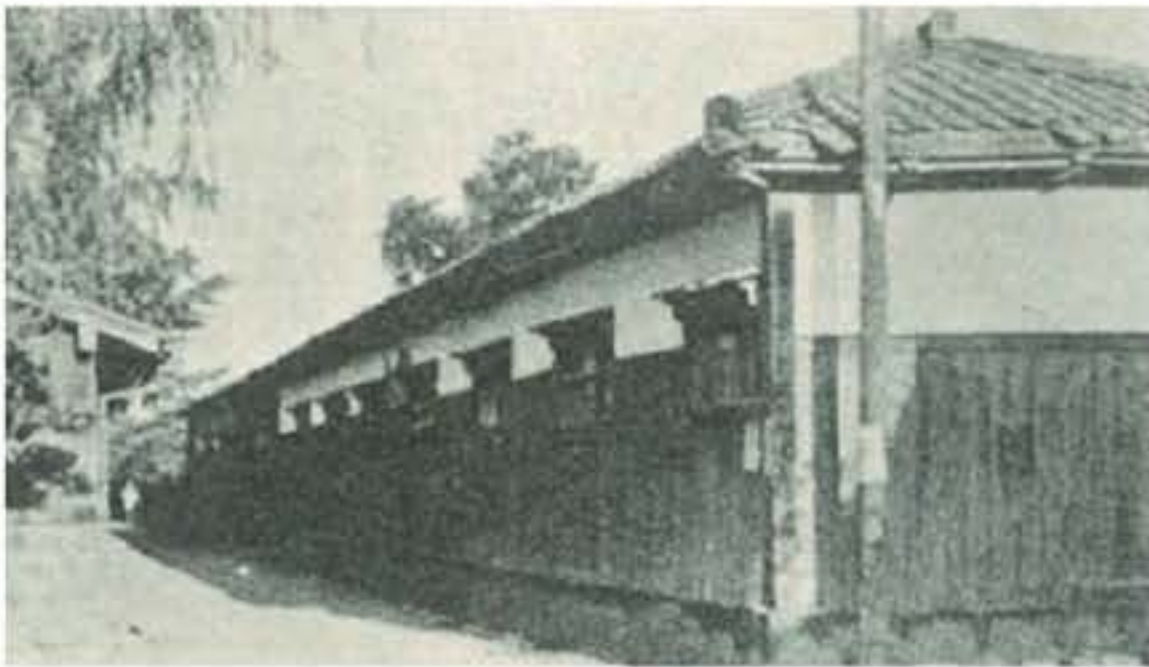
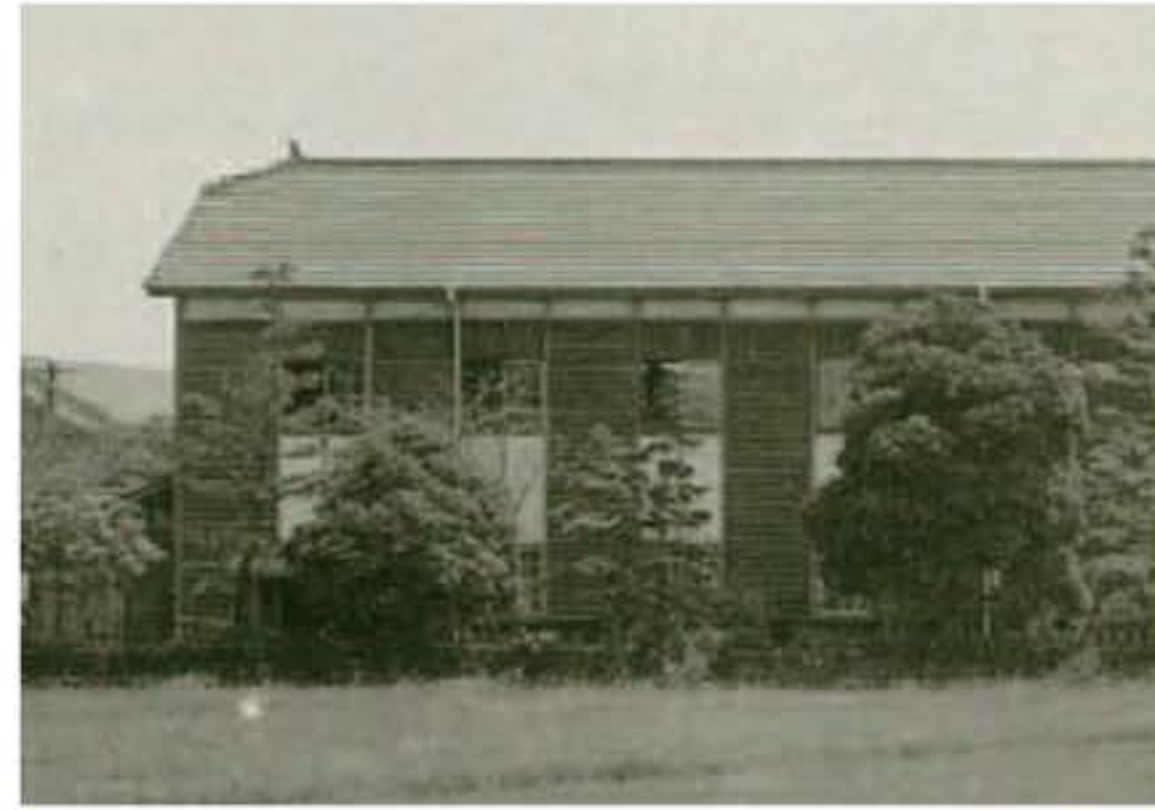
初代校長には、東京工業大学予備部主事で理学博士の福井私城がつき、機械科、精密機械科、工作機械科、鋳山機械科、採鋳科の5学科200名を募集した。学内には旧制高校に近い自由闊達な雰囲気があった。鵜之島にあった仮寮では、この新設の高工をいかに他に負けないものにするか、学生が議論し、まちにくりだし気炎をあげたという。昭和15(1940)年には新築の常盤寮での生活がはじまり、名物の寮祭では、さまざまな出し物を楽しんだ。

その後、各学科で増員が続き、昭和17(1942)年には工業化学科が新設された。これには、機械系技術者の増強やエネルギー政策への重点化などをすすめる時代の要請が大きく影響していたようである。

昭和19(1944)年には、「宇部工業専門学校」へと改称し、工業教員養成所(機械科)を附設した。戦況が激しくなった同年の秋以降、学生は工場や鋳山へ勤労働員にかり出され、現地での出張授業もおこなわれるなかで、終戦を迎えた。



宇部高工の校章



好生堂長屋門（『萩市史』より）



華浦医学校の校舎と生徒（『山口大学医学部50周年記念誌』より）

18

医学教育のめばえ

県立医学校の創設と廃止

防長における医学教育のはじまりは、文政6（1823）年にさかのぼる。

ドイツの医師シーボルトが長崎に着任したこの年、徳山藩では藩校「鳴鳳館」内に医学館を置いて医学講義をはじめた。天保10（1839）年、萩藩では大坂、江戸で蘭学をおさめた青木周弼が藩医となり、翌年設立された医学所で医学教育がおこなわれた。この医学所は「好生館」、「好生堂」と改称し、明倫館にうつされ、のち、山口好生堂と萩分館に分かれた。

明治維新を迎えると、医科学教育にも変化がもたらされる。

明治5（1872）年、県は医術試験「壬申考試」を施行、下関には赤間関医学校が開設される。一方、山口好生堂は「山口県立山口医院」と改称後、明治7（1874）年に三田尻に移され、山口県立華浦医学校となった。明治9（1876）年には赤間関医学校を統合するが、県の財政難のため私学化されたり、県立として再興されたりした末、明治16（1883）年、廃校となった。

明治42（1909）年、県内の医師たちにより、山口県医師会が設立されるが、医師養成機関を復活させるにはいたらなかった。



山口県立医学専門学校旧校舎全景



病理解剖実習室



渡辺剛二



富田雅次校長



山口医専の校章



創立当時の医専生

山口県立医学専門学校の創立

県立の医学校が明治期に廃止された後、再興がかなわぬまま、約60年が過ぎた昭和19(1944)年、宇部市下宮地(現在の北琴芝)に山口県立医学専門学校が設立された。

設立にあたっては、宇部興産株式会社会長で、県医師会会長でもあった渡辺剛二(渡辺祐策の次男)の尽力が大きい。設立資金250万円のうちの50万円を寄付し、県下の会社、個人、医師会等からも寄付を集めた。

初代校長には、台北帝国大学医学部教授だった富田雅次が着任した。入学生約120名、教官は常勤・非常勤を合わせて約30名の小さな組織だったが、「昭和の松下村塾」となることをめざし、教授と学生が起居をともにして熱心な教育を実践した。

創立当初は戦時下であり、実習器具や参考書も十分ではなかったが、実験器具として備えられた顕微鏡は当時自慢のもので、空襲があるたびに奉安殿に格納したという。

昭和20(1945)年、長崎に原爆が投下されると、富田校長以下、教授6名、助教授1名、学生18名がただちに長崎に赴き、救護、調査にあたった。



当時の開墾の様子



学校でとれた芋を食べる学生



山口経専の寮日誌
「若き者は夢を持たねばならぬ」と
新しい時代に生きる若者を
激励するような一文も見られる。

19

混迷から新しい時代へ

学舎への復帰

戦争末期、深刻な労働力不足を補うため、全国で学徒が勤労働員された。山口県の各校でも、生徒たちは毎日のように集団勤労作業にかりだされ、河川の改修、築堤、農場開墾、工場作業などをおこなった。県外への派遣や軍隊への応召で学舎をはなれる生徒、教職員もあった。

昭和20(1945)年8月15日に終戦を迎えると、学徒動員や勤労働員で各地に散らばっていた学生がもどり、9月ころから徐々に授業が再開されていった。しかし食糧難のため、授業や試験がボイコットされることもあり、混乱は長く続いた。軍学校の学生や外地の専門学校から復員した学生など、さまざまな経歴のものが編入・転入学する一方、経済的事情などで、やむなく学窓を去るものもあった。

深刻な食糧難に対応するため、各校では、授業を繰り合わせては、あらゆるところを開墾し畑にしていた。昭和21(1946)年3月頃に旧制山高が運営していた農園は、じつに校舎内外と旧射撃場の2町6反(東京ドームの約半分の広さ)におよんだ。土曜日の午後には、多くの寮生がリュックを担いで、自宅へ食糧を取りにもどった。学校では夏休みを延長したり、「食糧休暇」を設けたりして、この食糧難をなんとかしのいでいた。



学生たちの集会の様子



デモ行進



学生たちの集会の様子



県知事を囲んで昇格歌を歌う山口医専生



県知事に要望書を手渡す山口医専生



「図書等設備充実費寄附募集趣意書」(昭和23年11月)

新学制に向けて— 昇格か、廃校か

一方、日本の教育制度は、戦後の新しい体制へと歩をすすめていた。

昭和21(1946)年、「日本国憲法」公布。そして、翌22(1947)年、「教育基本法」、「学校教育法」が制定され、6・3・3・4制の学校制度や男女共学が発足することになった。

高等教育機関は新制4年制大学に一本化されることとなり、それまでの高校、専門学校、師範学校は、新制大学に昇格か、新制高等学校か、廃校かの選択をせられた。

県内の官立5校——山口高等学校、山口師範学校、山口青年師範学校、山口経済専門学校、宇部工業専門学校——、および県立2校——医学専門学校、山口獣医畜産専門学校——は、新制大学への昇格をめざし、それぞれ運動を展開させる。学校ばかりでなく、県民、市民も地元への大学誘致に熱意を注いでゆく。

COLUMN

男女共学

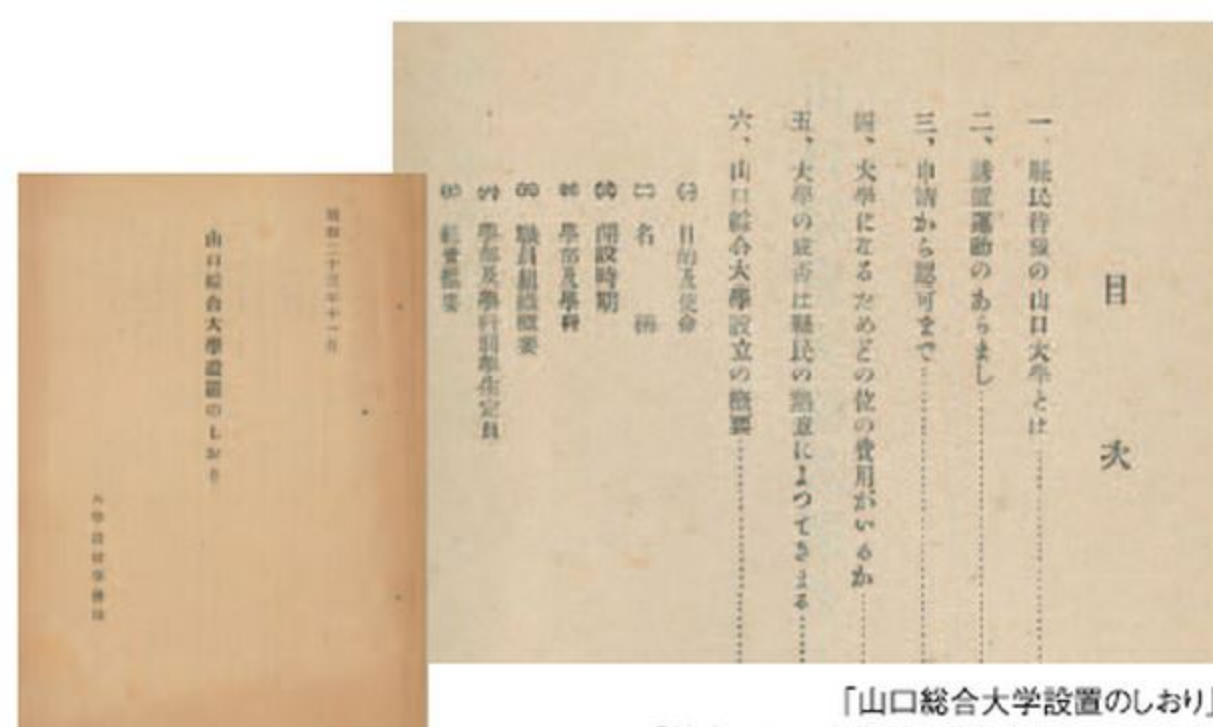
昭和22年、男女共学がはじまった。その年の女子入学者は旧制山高が1名、宇部工専3名。当初、共学反対の学生が多かったが、戦後再開されたアメリカ映画「キュリー夫人」が上映されていた影響もあり、「全国にさきがけて(女性に)門戸を開き、わが高からマダム・キュリーを出そうではないか!」という声で空気が変わったといわれる。なお、山口経専では1名の女子志願者がいたが、残念ながら入学ははたせなかった。



山口市全景(昭和22年頃)



文部省学校教育局長からの通知「直学62号」



「山口総合大学設置のしおり」

「教育こそ、日本復興の基盤をなすものであり、山口大学の設置は、明日の山口県に光明を与えるものである。」
ことを真剣に考え、百五十万県民の皆様と共に、是非、総合大学設置の悲願を、達成したいと思います。
と県民に呼びかけた。

20

山口大学誕生

設置はほぼ確実に

昭和22(1947)年、他にさきがけ、県立医学専門学校が山口県立医科大学(旧制)へ昇格した(昭和27年より新制)。一方、ほかの専門学校は、単体ではなく総合大学としての昇格をめざす方向に転換する。

翌23(1948)年6月、混沌としていた政府の方針がようやく定まった。文部省は、新制国立大学設置についての「十一原則」を決定。大学が大都市に集中することを避け、一府県一大学を設置すること、教養および教職に関する学部か部をおくこと、第一学年から発足すること、など十一の原則が定められた。

7月、「国立山口大学設立申請書」が受理され、第二水産講習所をのぞく官立5校による4学部と山口獣医畜産専門学校による1学部の設置がほぼ確実となった。

残る問題は、設置にかかる莫大な費用である。県負担額以外に、建物や施設、図書などにかかる5000万円について、郡市別に目標額を決めて、県民から募金を集めようとした。しかし、食べることに困るような時勢においてはむずかしく、県外の関係者、関係機関の寄付をうけて、なんとか財源を確保するにいたった。

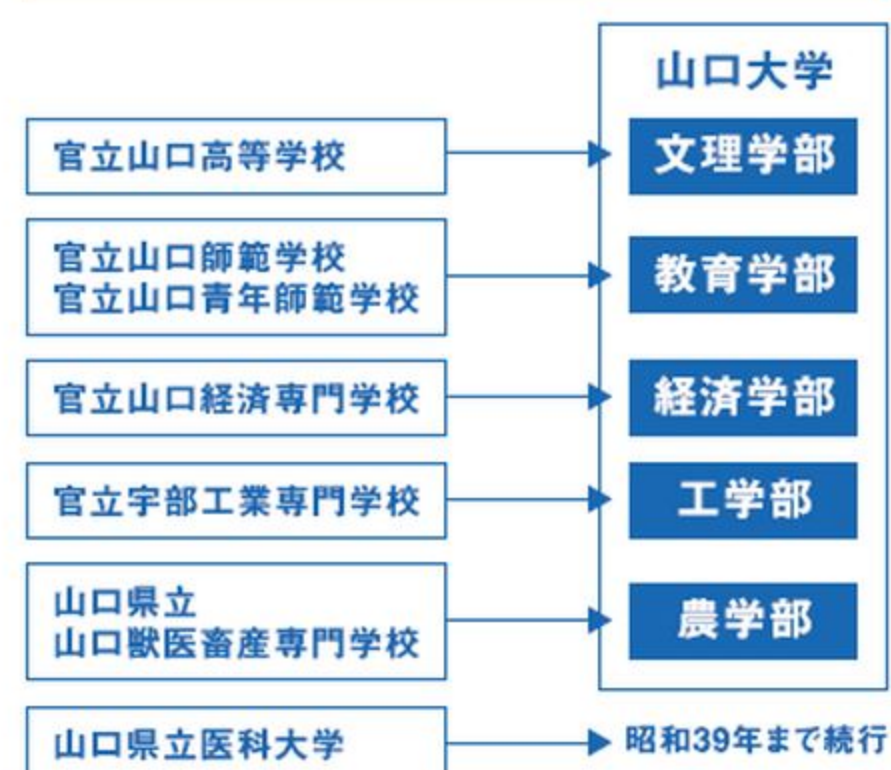
※第二水産講習所
農林省直轄の水産専門学校で、昭和22(1947)年、下関市に開設。現在の水産大学の前身。
「国立山口大学設立申請書」では水産学部への昇格がめざされた。



第1回入学式で告辞を述べる松山学長

門標も「山口大学」へ
（「防長新聞」昭和42年6月2日より）

旧高専校から学部への移行図



新制大学スタート

山口県総力をあげての運動が、ついに結実する日がやってきた。昭和24（1949）年6月1日、全国の国立大学69校のうちの1校として、総合大学、**山口大学**が誕生した。

学生定員は文理学部105、教育学部160、経済学部160、工学部120、農学部60の計605名、本部を経済学部におき、初代学長には京都大学名誉教授の松山基範^{もと のり}が着任した。

教育理念として、広く教養的知識を授け、深く専門の学術を教授研究することが掲げられた。あたらしい時代をになうにふさわしい、教養豊かな、視野の広い人材を送り出すために、山口大学は始動したのである。

7月15日に第1回入学式、11月5日には、教職員250名、文部大臣、ガッサー山口民事部隊長、田中県知事、山下山口市長ら来賓を招いての開学式が挙行された。

開学式の前後には、運動会や音楽会、対抗野球試合などの行事が開催され、設立に力を尽した県民へ感謝が表された。のちに6月1日が創立記念日と定められ、11月には大学祭が開催されるようになり、現在にいたっている。

なお、山口県立医科大学は、同27（1952）年に新制大学となり、さらに同39（1964）年に国立に移管、山口大学の学部統合された。